

2024 年度
三井住友海上火災保険株式会社
駿河台緑地における野鳥モニタリング
年次報告書

2025 年 5 月
法政大学人間環境学部
高田雅之

目 次

1. 野鳥モニタリングの概要
 - (1) 目的
 - (2) 方法
 - (3) 環境の概要
2. 個体数と種数の変化と特性
 - (1) 2024 年度の個体数と種数
 - (2) 月別の種構成割合
 - (3) 2016 年度以降の変化
 - (4) 月変化の過去 5 年間の傾向
 - (5) 飛来頻度の少ない鳥
 - (6) 近年増加傾向の鳥
 - (7) 特筆すべき種
3. 場所の利用特性
 - (1) 月変化と種ごとの利用傾向
 - (2) 種ごとの利用機会割合
 - (3) 利用個体数の種別順位
4. 飛来する集団の大きさ
 - (1) 集団の大きさの月変化
 - (2) 過去 4 年間の傾向
5. 哺乳類による利用
6. 定例探鳥会での観察結果
7. まとめと課題

参考資料

1.野鳥モニタリングの概要

(1) 目的

三井住友海上火災保険株式会社が千代田区神田駿河台の本社ビル周辺に整備した緑地において、野鳥を指標とした継続的なモニタリングを実施することにより、生物多様性に配慮した管理の効果を評価するとともに、周辺を含む地域的視点ひいては都心域というより広域視点において、一定規模の生物多様性に配慮した緑地が果たす機能と役割の考察に資することを目的としている。

同時に野鳥は視覚に訴えやすく、また識別も比較的容易であることから、多くの人に生物多様性を伝達する指標として効果的であり、また広域的な生息環境を要することから都心部における野鳥飛来の動向を示す物差しともなり得る。加えて継続しやすい調査であることから、長期的な変化を捉えるのに適した対象であり、2016 年度以降概ね同じ条件で継続しているデータから読み取れる傾向を明らかにすることも本報告書を取りまとめる狙いのひとつである。

(2) 方法

三井住友海上火災(株)が 5 箇所（うち 1 箇所は 2021 年 1 月に移設）のバードバスに設置した定点カメラより取得した画像について、法政大学人間環境学部高田ゼミと共同でデータの回収と取りまとめを行った。5 箇所のバードバスの位置は図 1-1 のとおりであり、それぞれ「ECOM 前庭」「サンクチュアリ」「屋上ビオトープ」「菜園横」及び「南側西」と称するサイトである。

カメラの機種は 2 種類(Bushnell トルフィーカム ネイチャービューHD ライブ、RECONYX HC500)であり、センサーにより野鳥を検出するごとに撮影され、日時と気温が同時に記録される。得られた画像より、飛来した箇所、年月日、時刻、種、個体数（5 分以上の経過で別個体と見なした）、気温、撮影方法（可視光か赤外線か）を表データとして取りまとめ、集計と分析を行った。

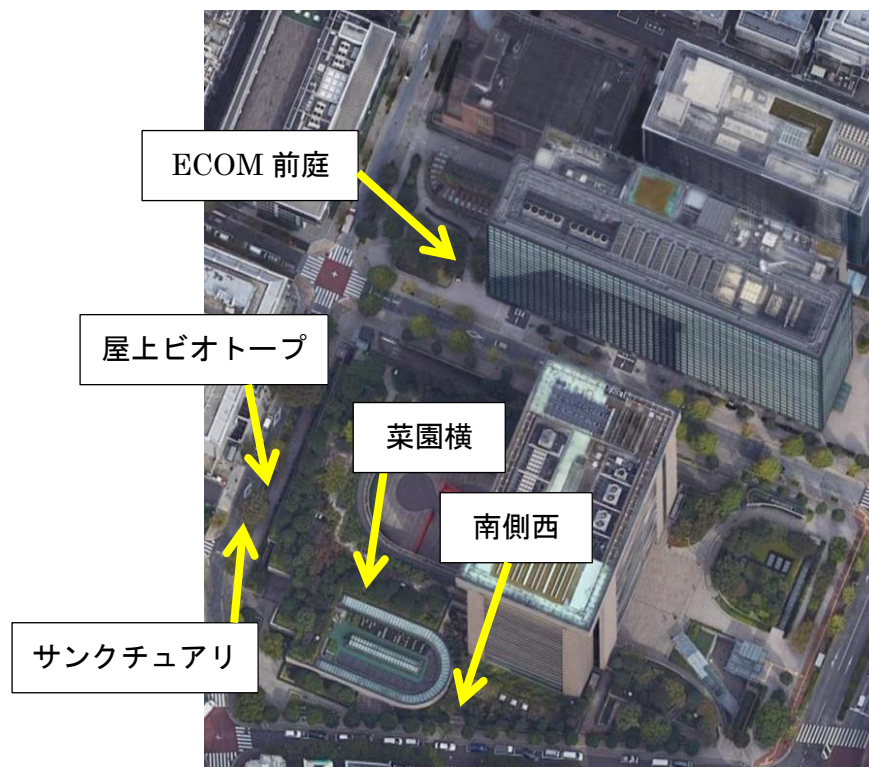


図 1-1 カメラ設置箇所（背景は Google Earth）

(3) 環境の概要

周囲に立つ樹木は常緑樹で通年葉をつけている。一方草本類はしばしば手入れの際に刈り取りがなされ、カメラを通して環境が変化の様子がうかがえる。適度な管理によって、野鳥にとってアプローチしやすく、また周囲の状況に注意を払いやすい環境が維持されている。



ECOM 前庭：比較的開放空間で草原的、歩行者が視覚に入りやすいが一定の距離がある



サンクチュアリ：背の低い草本に囲まれた開放的な空間。しばしば周囲の草丈が高くなる。



屋上ビオトープ：水面・石・比較的背の高い草で構成、三方にフェンスがあるのが特徴



南側西：柴壁に囲まれた狭く閉鎖的な空間で周囲から身を隠しやすい



菜園横：菜園と生垣を隔てて隣接し、反対側は樹木が茂っておりその間にフェンスがある

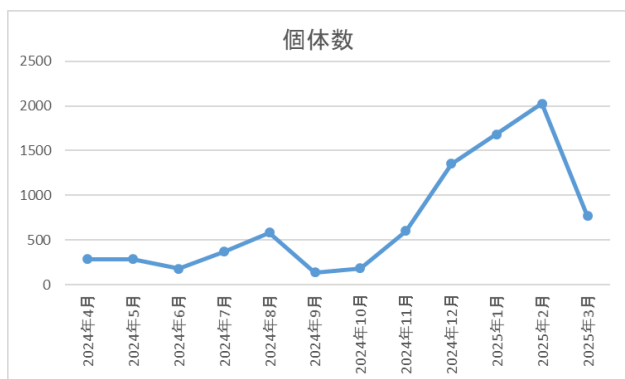
2. 個体数と種数の変化と特性

(1) 2024 年度の個体数と種数

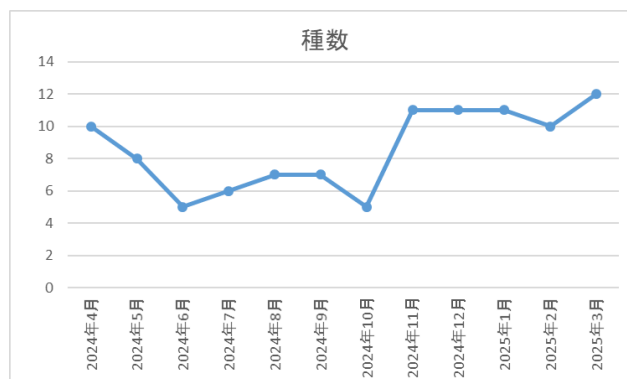
2024 年度は 2016 年度以降最高となった 2024 年度の 18 種に次ぐ 17 種の野鳥を記録した。月別に集計した野鳥種ごとの個体数データを用いて、全個体数（哺乳類は含まれていない）、種数、主要 4 種（個体数の多い 4 種（キジバト、スズメ、ドバト、ヒヨドリ）を「主要 4 種」と称する）、個体数は少ないが恒常的に飛来するシジュウカラ、メジロ、ハシブトガラス、主要な冬鳥であるツグミ、シロハラ、そして近年飛来数が増加しているオナガ、アカハラの各個体数の月変化を図 2-1 (1) ～ (13) に示した。これらの図より、それぞれ以下の傾向が読み取れる。

- ①全個体数は 4 月から 11 月は 1,000 羽以下で推移し、2 月は最大の 2,024 羽となった（図 2-1 (1)）。1 ヶ月に 1,000 羽を超えた月は 3 回で、2016 年度 0 回、2017 年度 1 回、2018 年度 2 回、2019～2021 年度 3 回、2022～2023 年度 2 回（補正含む）と推移している。
- ②種数は概ね例年に近いパターンを示し、夏場に少なく冬場に多くなる傾向が見られた（図 2-1 (2)）。3 月は過去最大の 12 種を記録し、これは 2016 年度以降 3 回目である。
- ③キジバトは 4 月から 10 月は概ね 100 羽以下で推移し、11 月以降増加し 1 月と 2 月に 515 羽のピークが見られ（図 2-1 (3)）、例年どおり冬期間の利用が多いことが示された。また例年よりもピーク月が 12～2 月と長い傾向が見られた。
- ④スズメは繁殖期の 4～8 月にやや多く、8 月に顕著なピークが見られた。2022 年度以降 3 年連続でそれ以前と比べて飛来数が少ない状況が継続して続いていた（図 2-1 (4)）。
- ⑤ドバトは 5 月から 9 月はほとんど飛来せず、11 月以降に多く飛来しているのは例年と同様の傾向である（図 2-1 (5)）。ピークは 1 月に見られ、ピーク月の飛来個体数は 45 羽であった。ピーク月の個体数が 100 羽以下となったのは 2017 年度以来となり、飛来数の減少が顕著に見られた。
- ⑥ヒヨドリは通年飛来する種であるが、5 月から 9 月は 100 羽以下であり、例年と同様に冬期に多くなる傾向を示している（図 2-1 (6)）。ピーク月は 2 月で個体数は 1,378 羽と、減少した 2023 年度と比べて 2022 年以前と同水準となった。2023 年度の減少は欠測によるものと考えられ、冬期間に集団で飛来する姿が 2024 年度は見られた。
- ⑦シジュウカラの飛来個体数は主要 4 種と比べて少なく、季節的傾向も必ずしも一定ではない。2024 年度は例年に比べて 11 月～1 月の飛来個体数が多く、12 月の 25 羽がピークとなった（図 2-1 (7)）。
- ⑧メジロは通年飛来するものの平地における主たる飛来時期は一般に冬期であり、例年冬から春にかけての時期に個体数が多い傾向が見られる。2023 年度は飛来数が少ない傾向が見られたが、2024 年度は 11 月以降飛来数が多く見られ、ピーク月の 12 月は 67 羽が飛来した（図 2-1 (8)）。
- ⑨ハシブトガラスは 2020 年度以降目立って頻繁に飛来し始め、2023 年度は春先の個体数の多さが特に顕著であったが、2024 年度は春期に飛来が目立ったものの年間飛来数は 2020 年度以降最低数となった（図 2-1 (9)）。ハシブトガラスは東京では個体数が減少しているとされており（東京都, 2024）、その傾向との比較を含めて引き続き飛来動向に注意を払っていく必要がある。

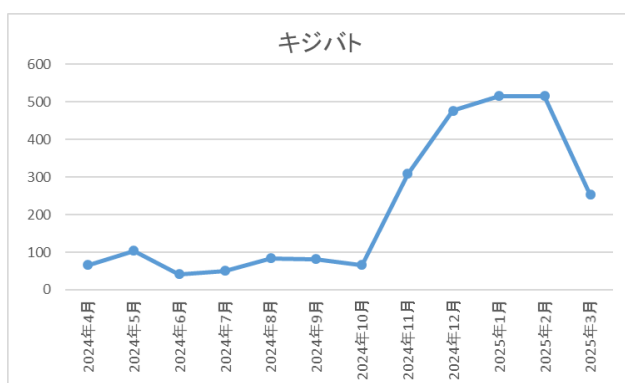
(1)



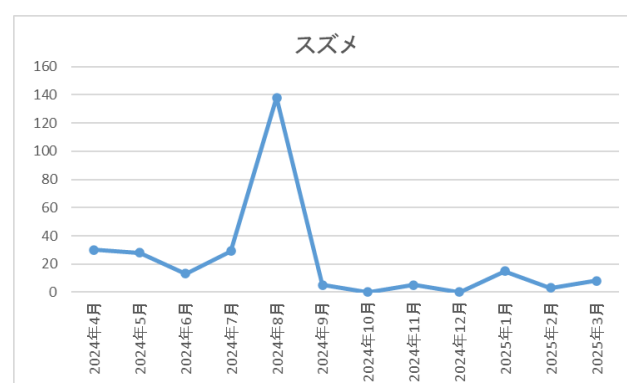
(2)



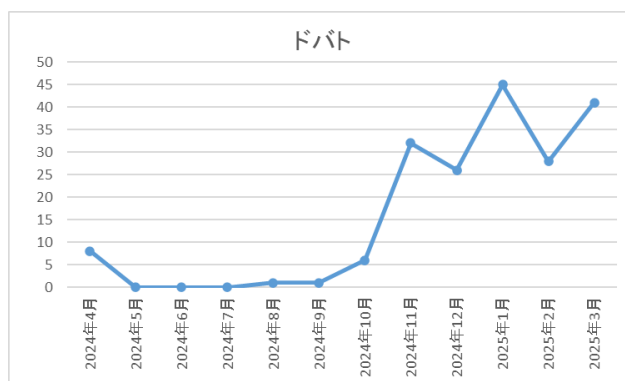
(3)



(4)



(5)



(6)

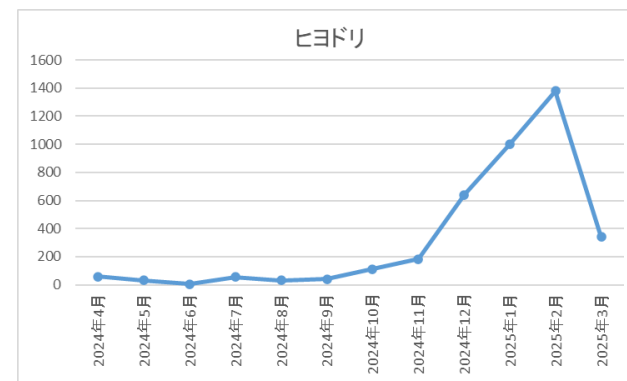
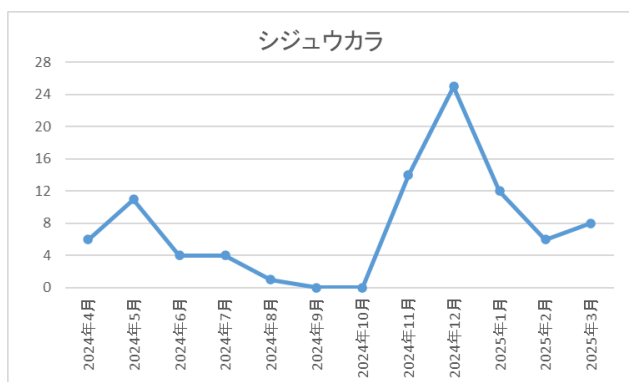
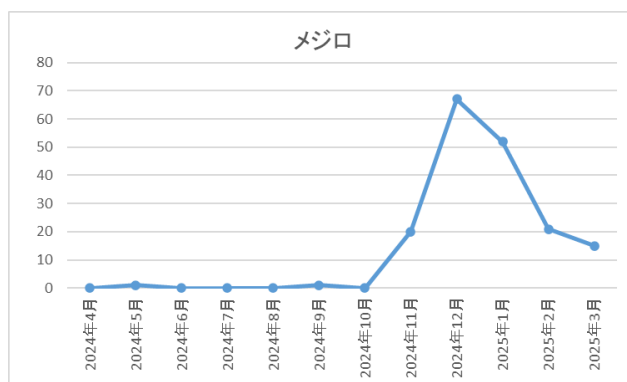


図 2-1 個体数・種数の月変化 1 (オレンジ色は補正後の数値)

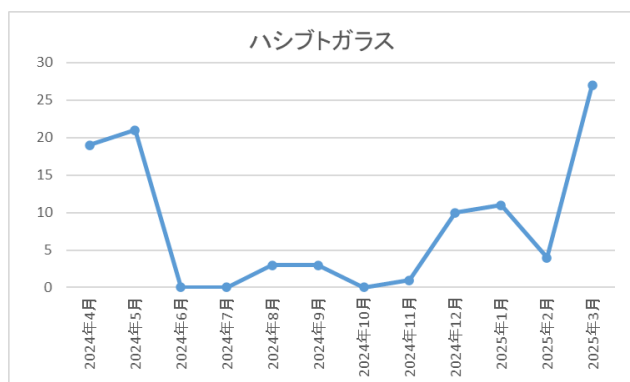
(7)



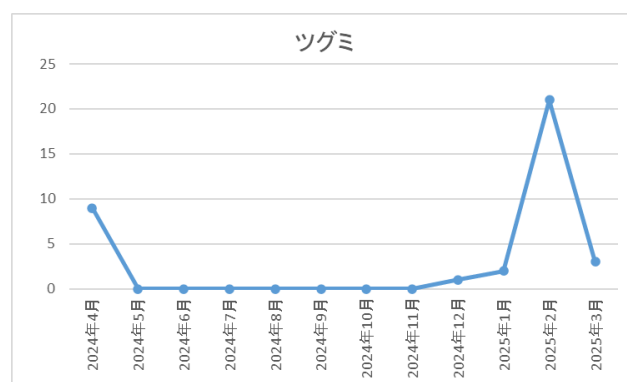
(8)



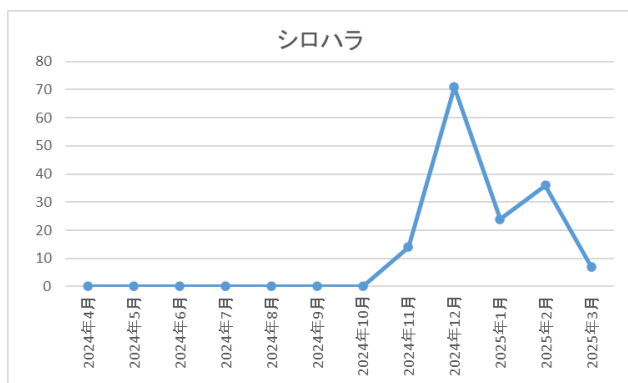
(9)



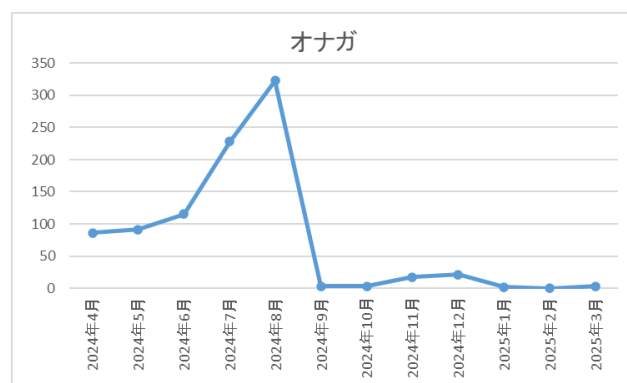
(10)



(11)



(12)



(13)

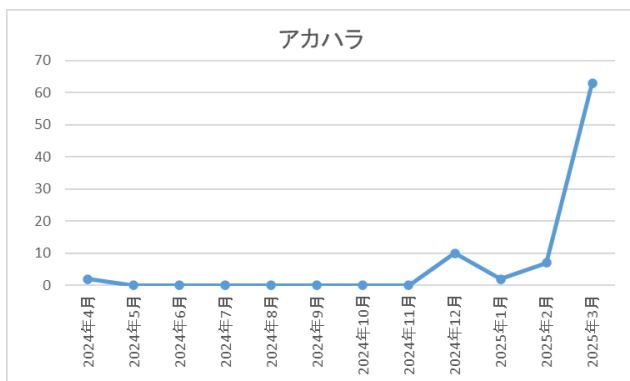


図 2-1 個体数・種数の月変化 2
(オレンジ色は補正後の数値)

- ⑩毎年冬期に日本に飛来するツグミは、例年同様冬期に増加が見られたが（図 2-1（10））、飛来数は 2016 年度以来過去最少となり、ピーク月である 2 月の個体数は 21 羽であった。冬鳥の渡来数は一般に年によって著しく変動し、要因として繁殖地での餌の量や繁殖成功率などが考えられている。
- ⑪同じく冬鳥のシロハラは、冬鳥に特徴的な年による変動があり、2024 年度はツグミと対照的に過去最高の飛来数となった（図 2-1（11））。ピーク月は 12 月で 71 羽の飛来が確認された。
- ⑫オナガは 2023 年度に初めて記録され、2024 年度は 4～8 月にわたって 892 羽と著しい飛来数の増加が見られた（図 2-1（12））。ピーク月は 8 月で 323 羽であった。9 月以降も飛来が見られたが、数は極端に減少した。オナガは留鳥でその増減蛍光は場所によっても異なり、引き続き駿河台の飛来状況について注視していきたい。
- ⑬アカハラは国内では冷涼地で繁殖し冬に関東以西に漂鳥として飛来する。駿河台では過去に 2020 年 1 月に 7 羽、2022 年 4 月に 1 羽の観察のみであったが、2023 年度以降顕著に飛来数が増えている（図 2-1（13））。ピーク月は 3 月で 63 羽が飛来した。同じ個体が繰り返し飛来した可能性はあるものの、滞在期間が一時的ではないことから、次年度以降も注目したい種と言える。

(2) 月別の種構成割合

図 2-2 に月別の総個体数に占める主要 4 種・メジロ・ツグミ 2 種（ヒタキ科ツグミ属のツグミとシロハラ）・ハシブトガラス・オナガ・その他の内訳を示した。比率から概観すると、春から夏はオナガの利用が多く、秋以降はキジバトとヒヨドリが多く、季節に応じた傾向をもって、様々な種が本緑地を利用していることが明らかとなった。参考として 2023 年度の図と比較すると、2023 年度は春～初夏にスズメが多いことと、秋以降はドバトが目立ったのに対して、2024 年度はスズメに代わってオナガが、ドバトに代わってキジバトが増えたことなどの変化が見られ、年による変化が意外にも大きくなることが強く感じられた。

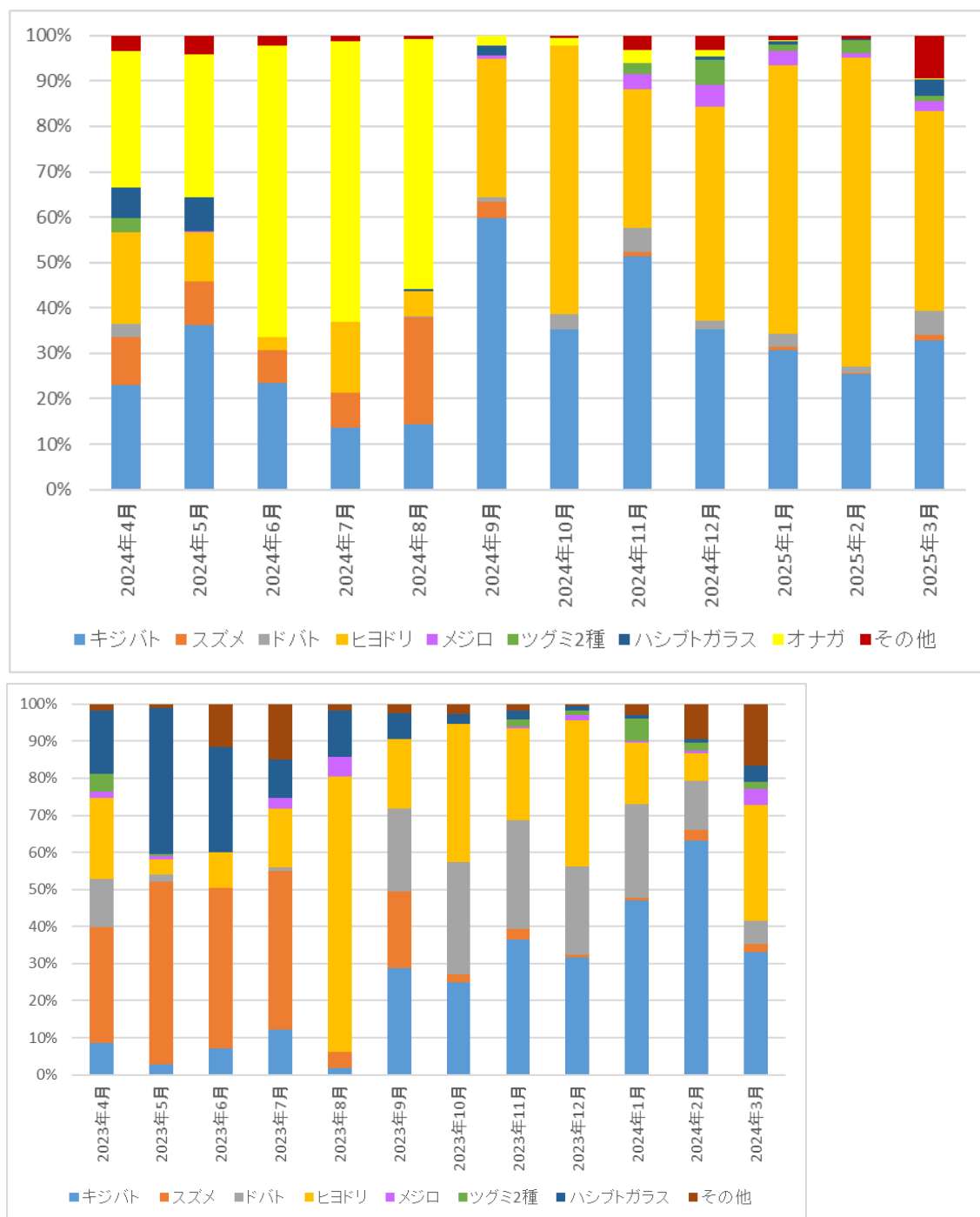


図 2-2 月別の総個体数に占める種別割合（上：2024 年度、下：2023 年度）

(3) 2016 年度以降の変化

月別に集計した野鳥種ごとの個体数データを用いて、全個体数、種数、主要 4 種（キジバト、スズメ、ドバト、ヒヨドリ）、シジュウカラ、メジロ、ハシブトガラス、ツグミ、シロハラ、ジョウビタキについて、2016 年 4 月以降の各個体数の月変化を図 2-3 (1) ～ (12) に示した。これらの図より、それぞれ以下の傾向が読み取れる。

- ① 総個体数は 2017 年度以降冬期に顕著に増加する傾向が引き続き見られている（図 2-3 (1)）。冬期以外の個体数の増加についても、2018 年度以降増加していたが、2022 年度以降はやや少ない傾向が見られる。
- ② 種数は 2016 年度以降冬期に増加する傾向が見られ、2018 年度以降は冬期以外の種数も増加が見られ、2024 年度もその傾向は続いているといえる（図 2-3 (2)）。
- ③ キジバトは毎年冬期に個体数が多く見られ、2017 年度以降顕著となり、2022 年度はやや減少していたが、2023 年度以降は再び増加している（図 2-3 (3)）。
- ④ スズメは主として春期から初夏にかけて飛来数が増加し、2020～2021 年度に特に飛来数が多かったが、2022 年度以降は個体数の減少傾向が顕著に見られ、2024 年度もその傾向は変わらずに続いていた（図 2-3 (4)）。引き続き推移に注目していきたい。
- ⑤ ドバトは 2018 年度以降、冬期に顕著な山が見られており、2023 年度まで同様の傾向が見られたが、2021 年度以降はピーク時の個体数が減少し、2024 年度はほとんどピークが見られなくなった（図 2-3 (5)）。この動態はスズメと類似しており、引き続きその推移に注目する必要がある。
- ⑥ ヒヨドリは 2017 年度以降、冬期に顕著なピークを示しており、年々ピークの高さ（最大個体数）が高くなっている。2023 年 3 月には過去最多の 1,889 羽が飛来したが、2024 年度は欠測を考慮しても飛来数は減少し、2024 年度は回復の傾向が見られた（図 2-3 (6)）。
- ⑦ シジュウカラは 2017 年度の冬以降、必ずしも規則的ではないが春期と冬期にピークが見られる傾向が続いており、この傾向は 2024 年度も引き続き示されている（図 2-3 (7)）。
- ⑧ メジロは毎年冬に飛来ピークを示し、2017 年度以降は特に顕著であったが、2022～2023 年度はピークが顕著に減少し、2024 年度は 2018 年度並みにやや回復傾向を示した（図 2-3 (8)）。
- ⑨ ハシブトガラスは 2019 年度までは飛来頻度は高くなかったが、2020 年度以降頻繁に飛来するようになり、2023 年度の春期は特に飛来数が多かったものの、2024 年度は 2019 年度以前並みに減少した（図 2-3 (9)）。東京都環境局による毎年の捕獲及び生息数調査によると、2016 年度以降はいずれも減少または減少後横ばいで推移しており、他の野鳥への影響も念頭に引き続き経過を観察していく必要がある。
- ⑩ ツグミは渡り鳥として冬期に飛来し、2020～2021 年度に飛来数が飛躍的に増加し、それ以降は減少気味であり、2024 年度の飛来はかつてないほど少なかった（図 2-3 (10)）。冬鳥は年変動が大きいとされることから、引き続き今後の推移に留意を要する。
- ⑪ シロハラは冬鳥として毎年飛来し、2019 年度と 2023 年度の個体数は顕著に多かったが、2024 年度はそれをはるかに超える飛来数が見られた（図 2-3 (11)）。同じ冬鳥でもツグミとは異なる変動傾向を示している点が興味深く、繁殖地の違い（ツグミはシベリア東部からカムチャツカ、シロハラはウスリー・アムール川下流域）による可能性も考えられる。

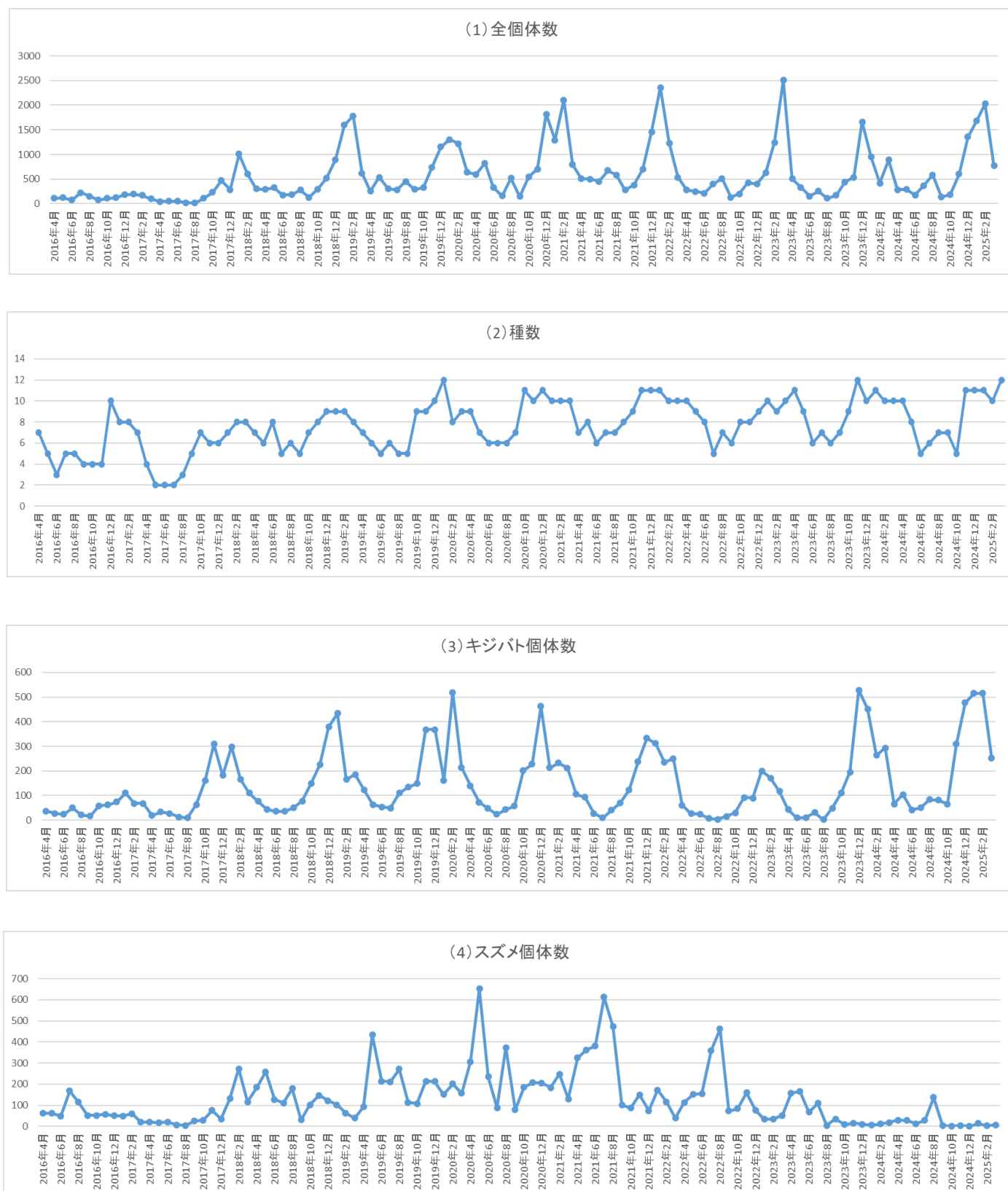


図 2-3 2016 年 4 月以降の個体数と種数の月変化 1

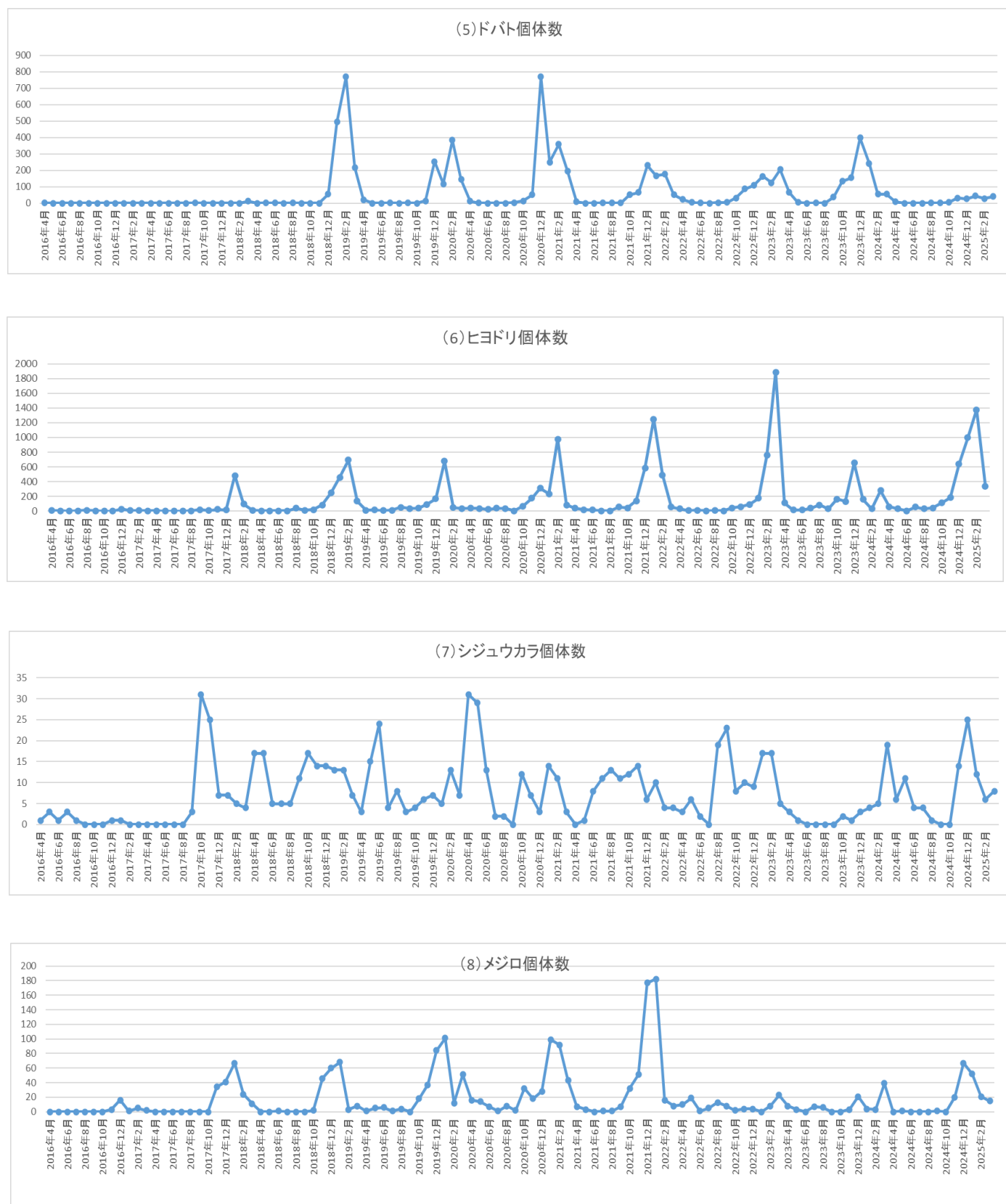


図 2-3 2016 年 4 月以降の個体数と種数の月変化 2

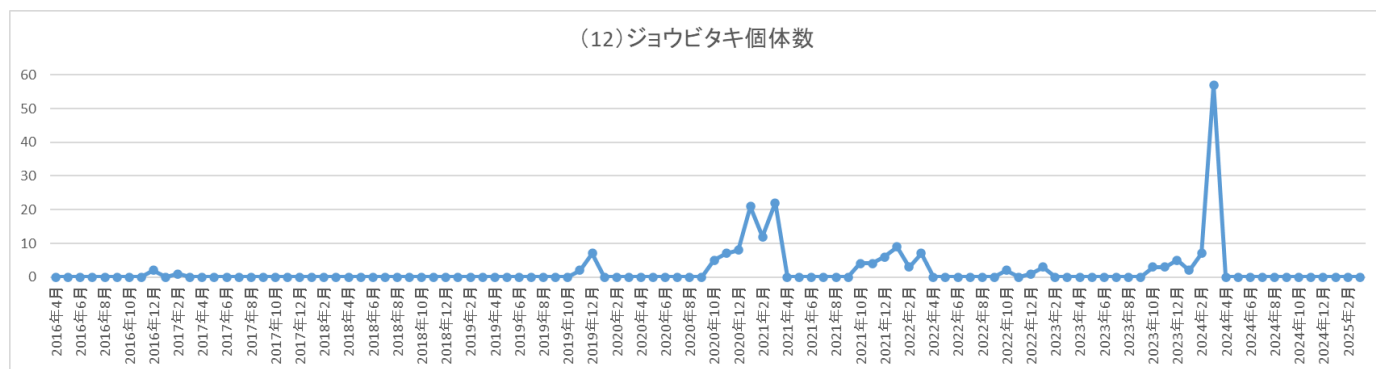
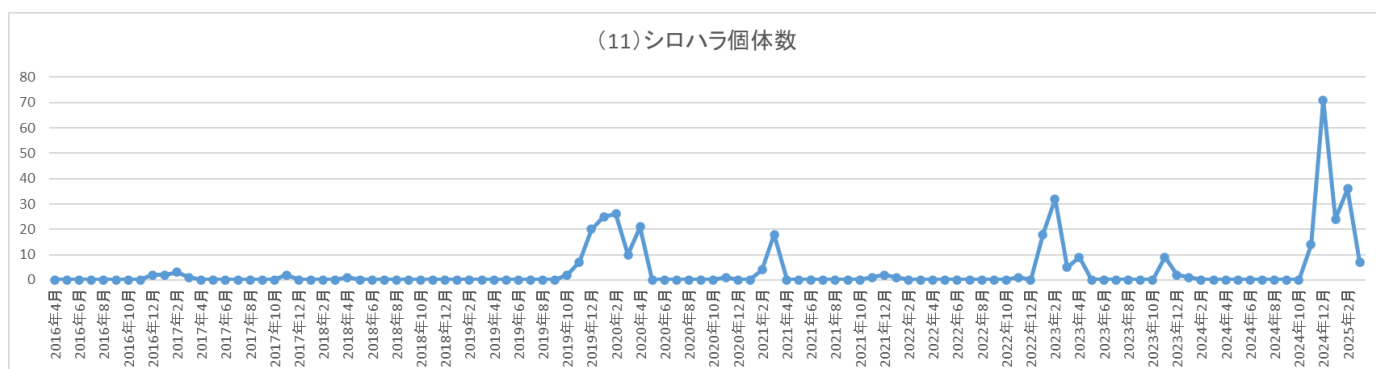
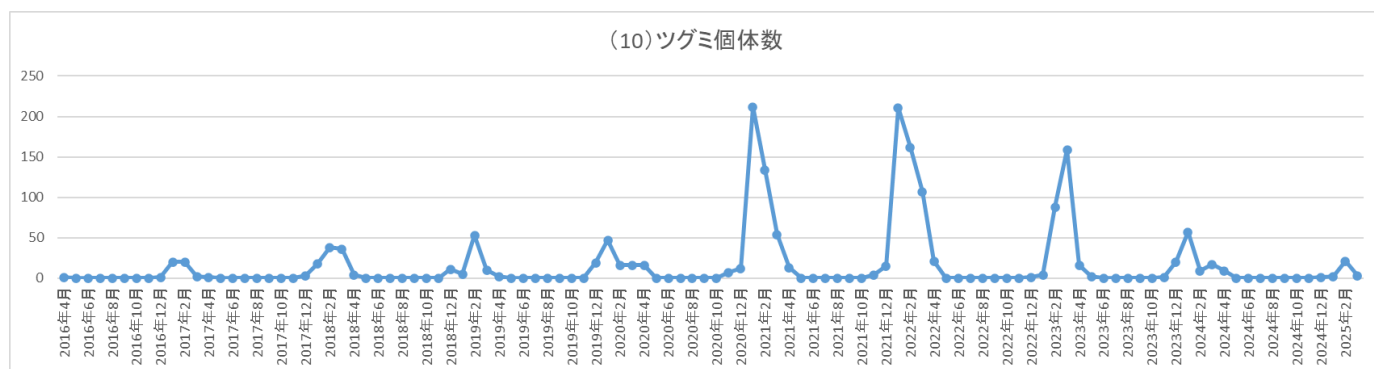
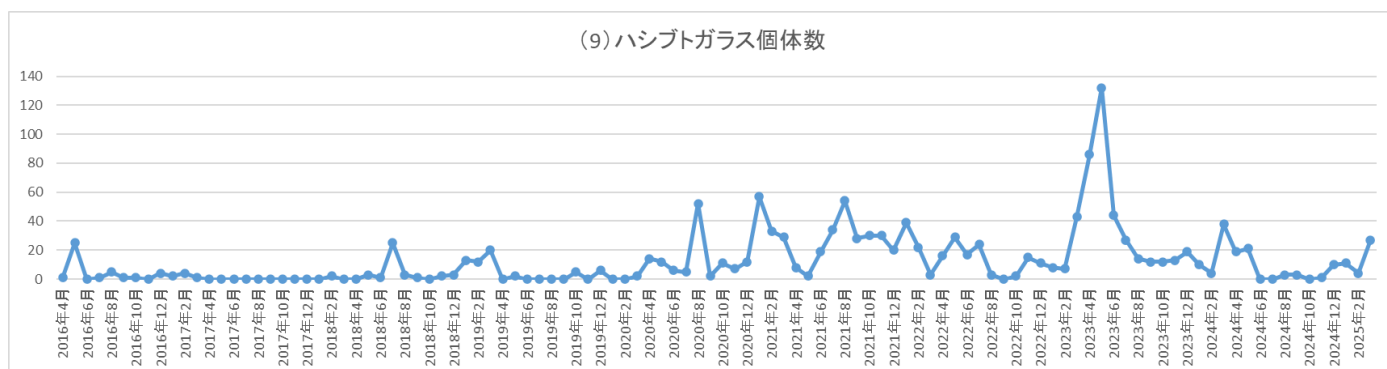


図 2-3 2016 年 4 月以降の個体数と種数の月変化 3

⑫ ジョウビタキは冬鳥として都市によって飛来数が変化しており、2020 年度と 2023 年度は多くの個体数が記録されたが、2024 年度は 1 羽も記録されなかった（図 2-3（12））。ジョウビタキは近年国内での繁殖が相次いで確認され、冬鳥と漂鳥の両面を持ち、冬鳥の年変動以外の要因も関わっている可能性があることを念頭に引き続き観察していきたい。

図 2-4 に全種及び種別の年間個体数の変化と年間のべ種数（毎月の確認種数を合計したもの）、年間確認種数の変化を示した。年間全個体数は 2022 年度と 2023 年度で幾分減少傾向を示しており、2024 年度は回復しており、2018 年度以降は高い水準を維持していると見ることができる。冬鳥以外で種別に見ると、増加傾向にあるのはヒヨドリ、概ね横ばいなのはキジバト、2021 年度まで増加し 2022 年度から減少しているのがスズメ・メジロ、2024 年度になって減少しているのがハシブトガラス・ドバトであった。

年間延べ種数と年間確認種数については、いずれも微増のトレンドがあり、毎年の実確認種数は 2016 年度 11 種、2017 年度 13 種、2018 年度 14 種、2019 年度・2020 年度 15 種、2021 年度 16 種、2022 年度 15 種、そして 2023 年度 18 種、2024 年度 17 種とこの 2 年間は高い水準となった。2016 年度以降に確認されたのは 27 種であり、このうち 8 年連続で確認されているのは 9 種であった（主要 4 種、メジロ、ハシブトガラス、シジュウカラ、ツグミ、シロハラ）。

以上より、以下のことが明らかとなった。

- ・ 2016 年度以降、最初の 3 年で野鳥飛来個体数が増加し、それ以降は高い水準を維持していること。
- ・ 2020～2021 年度の個体数がピークとなり今後の飛来動向が注目されること。
- ・ 特定の種に占有されることなく多くの種が利用し、飛来種数は漸増していること。

これらのことは周辺一帯においてまとまった緑地の少ない本地域において、本緑地が移動（渡り鳥）と滞在（留鳥）の両面において重要な役割を果たしており、その役割が維持されていることを示すものであると推察される。また都市内緑地の野鳥飛来効果の高まりを数年スケールで示すデータとしても意義がある。全個体数は概ね高い水準を維持していると言えるものの、種ごとに増減傾向が異なっており、広域的な動態傾向の可能性も含めて、引き続きモニタリングを継続するとともに、考察のための情報収集を行っていくことが重要であると考えられる。

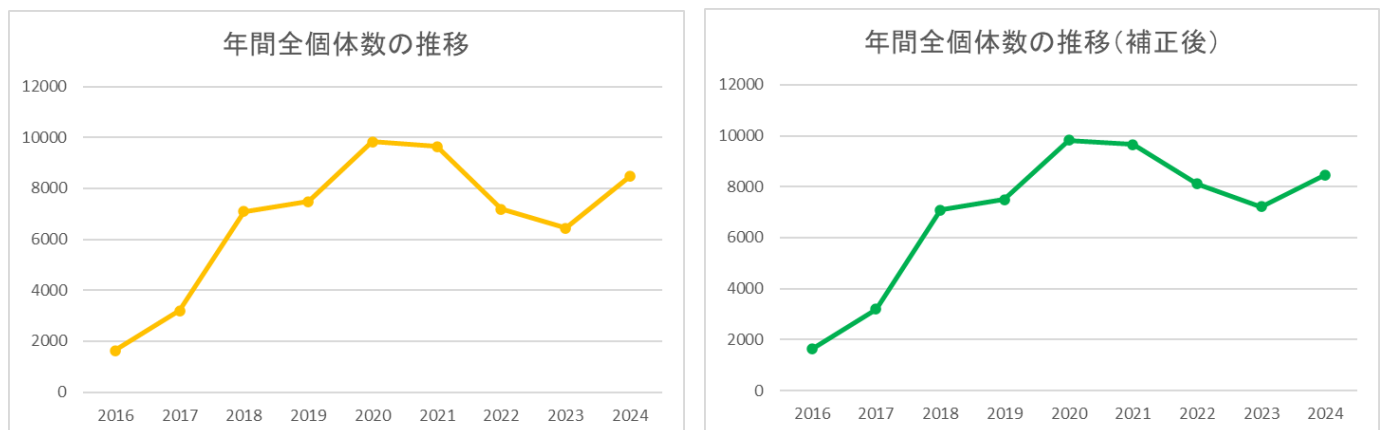


図 2-4 全種及び種別の年間個体数の変化と年間種数の変化 1

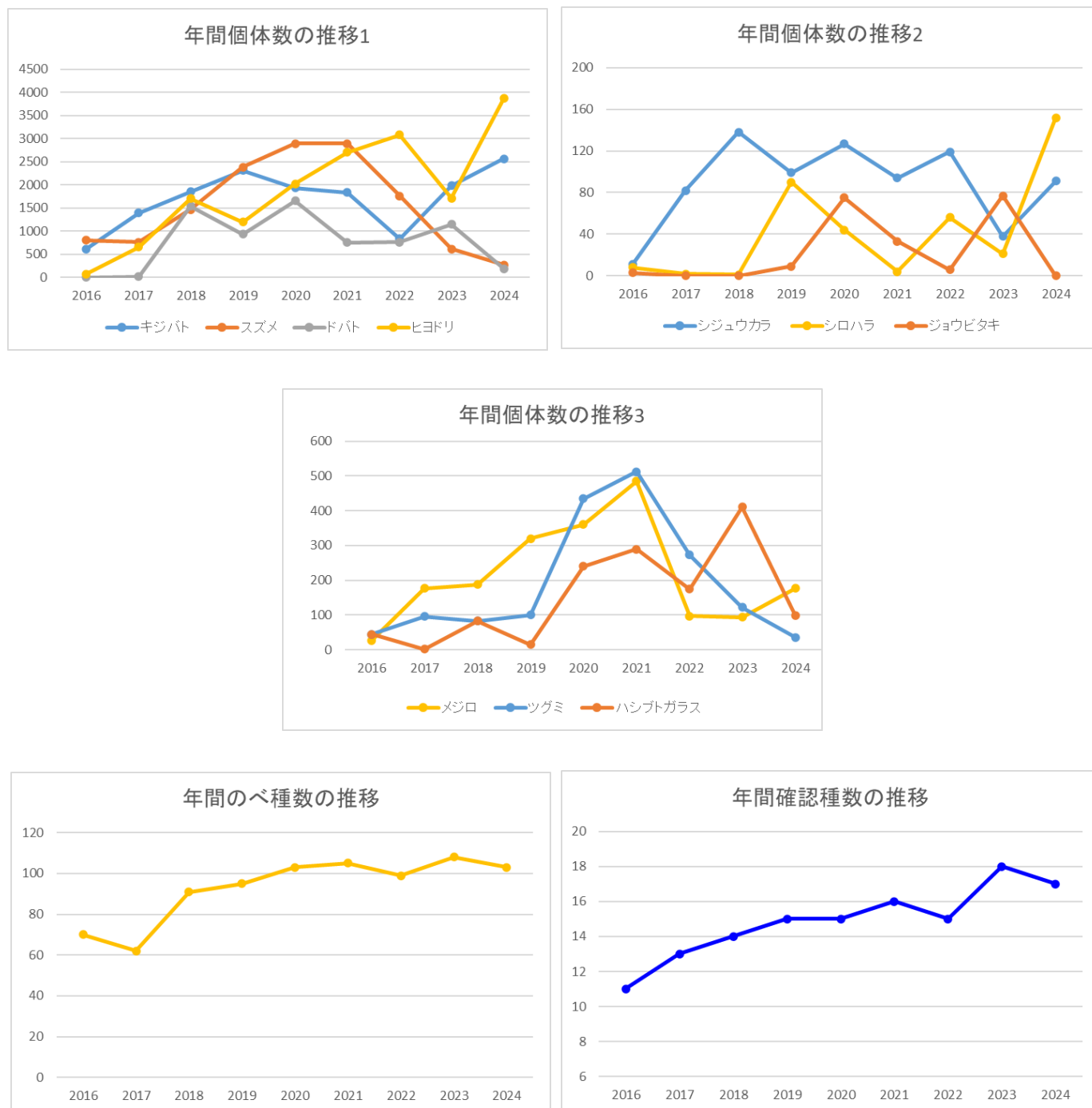


図 2-4 全種及び種別の年間個体数の変化と年間種数の変化 2

(4) 月変化の過去5年間の傾向

従前から飛来個体数が比較的多いと判断される8種（キジバト、ドバト、ヒヨドリ、スズメ、メジロ、シジュウカラ、ハシブトガラス、ツグミ）について、2020年度以降の過去5年間の月別個体数の変化を重ねた結果を図2-5に示した。冬にピークをもつ5種（キジバト、ドバト、ヒヨドリ、メジロ、ツグミ）は年によってピーク月がずれることはあるが概ね傾向は同じであった。ただしドバトとツグミについては2024年度の飛来数は著しく少なかった。これに対して、春から夏にかけてピークをもつ3種（スズメ、シジュウカラ、ハシブトガラス）は年によってばらつく傾向が強かった。その中でハシブトガラスは2024年度の飛来数は少ない傾向が目立った。

冬にピークをもつ種のうちヒヨドリについて、ピーク月は年によって変化し、2022年度は顕著に後ろへのずれが見られた。2023年度は欠測を含んでいるため不確定を含むが、個体数が例年より少ない状況がうかがわれた。また春～夏にピークをもつ種のうちスズメについて、2022年度以降飛来数が激減していることが明らかに見られた。飛来の月変化パターンの変化は、気候と関わる季節移動状況、また都市における個体数動向といった複合的な要因が考えられ、それを紐解くことは容易ではないが、モニタリングから見えることは何か、引き続き注意を払っていくことが肝要であると思われる。

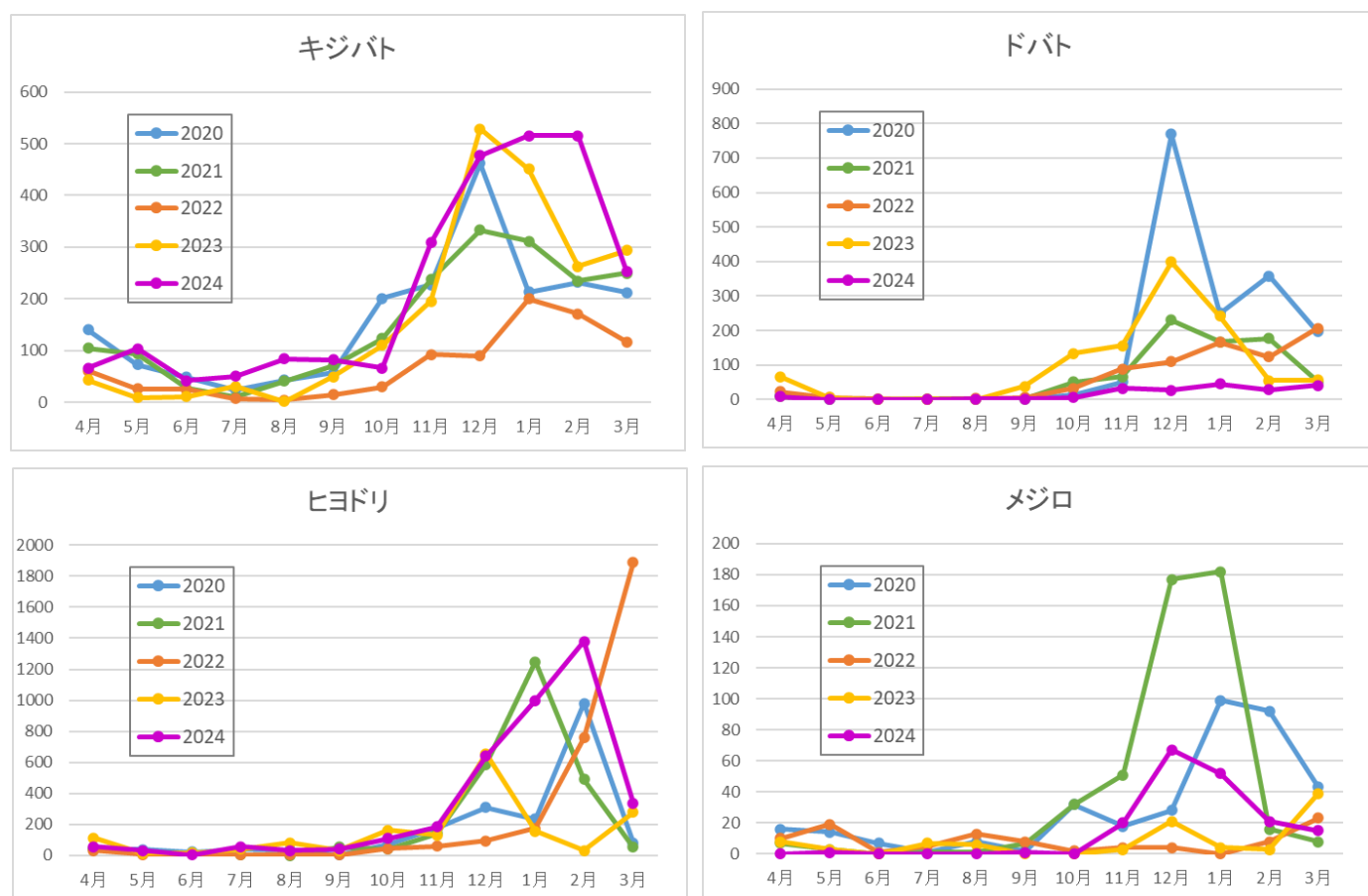


図 2-5 過去5年間の月別個体数の変化の比較 1

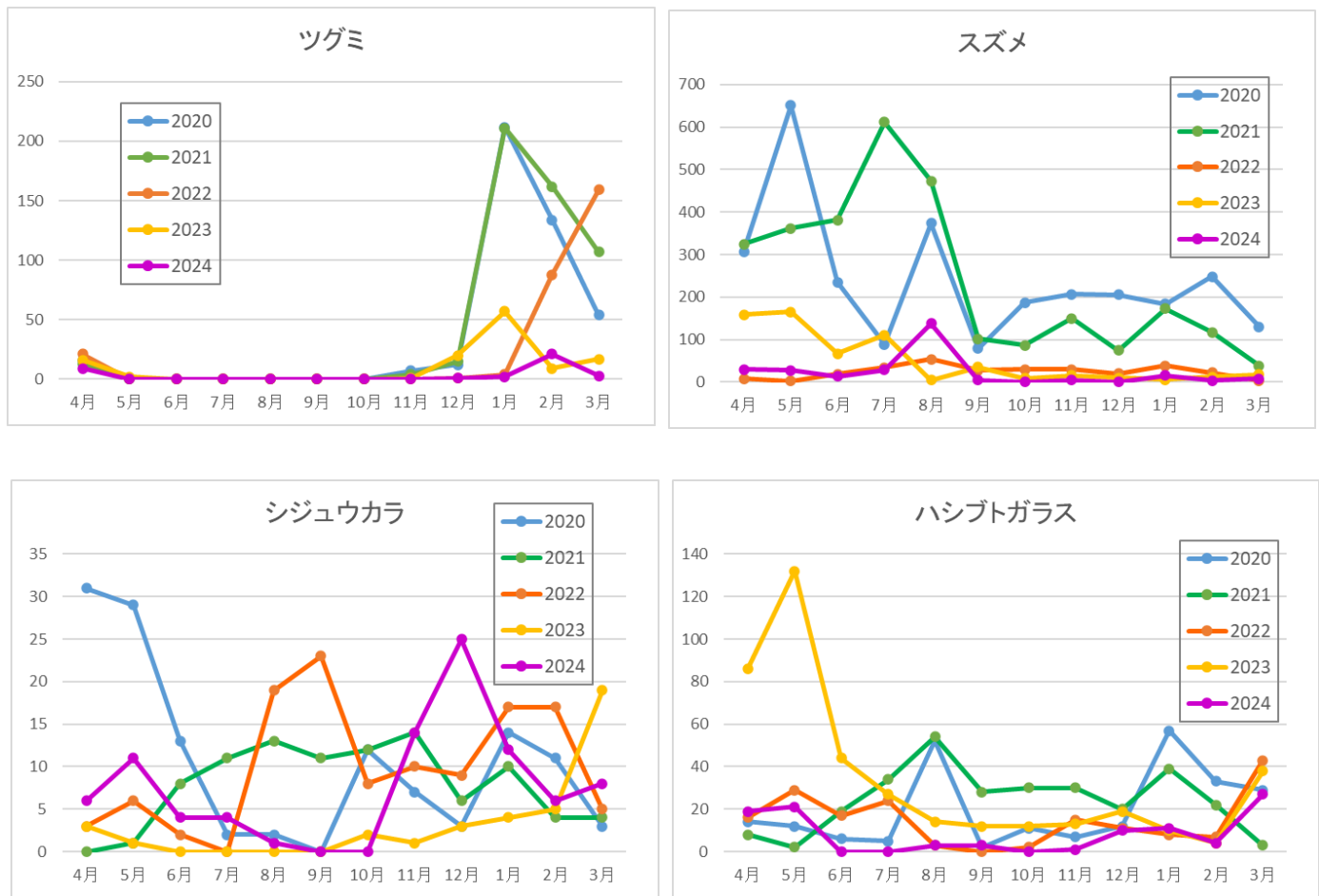


図 2-5 過去 5 年間の月別個体数の変化の比較 2

(5) 飛来頻度の少ない鳥

これまで確認された鳥の中で、冬鳥を含めて飛来頻度が比較的少ないもの（2回以上飛来したもの）について、過去9年間の飛来月を取りまとめた（図2-6）。対象とした鳥は、シロハラ、ジョウビタキ、ウグイス、キビタキ、カワラヒワ、アオジの6種に加えて、ここ数年飛来が確認されるようになったアカハラ、ムクドリ、オナガの3種、さらに2022年度以降複数回目の飛来があったマミチャジナイ、モズ、カシラダカの計12とし、1回限りで飛来した鳥は対象から除いた。

シロハラとジョウビタキはこれまでも述べてきた通り典型的な冬鳥で10月から4月にのみ見られた。これと同様な飛来傾向を示したのがウグイス、カワラヒワ、アカハラで、ウグイスは過去9年のうち7年飛来しており、いずれも10月から2月の間であった。カワラヒワは過去9年のうち5年飛来しており1月から5月に確認された。アカハラは過去9年のうち4年飛来しており12月から4月に確認された。アオジはこれまで2年確認されており、4月、10月、1月と冬鳥に近い傾向が見られたが2020年度以降は確認されていない。

これらの冬鳥に対して、キビタキの飛来は過去に8年あり、うち6年が9月または10月、2年が5月で、渡りの途中に立ち寄ったものと推察された。

2020年度以降飛来が確認された4種について、ムクドリは2021年度以降毎年4～7月に飛来し、モズは3年で9月または10月、カシラダカは2年とともに11月に確認され、いずれも渡りの時期と思われる。また2023年度に初めて飛来したオナガは、2023年度は6～8月の夏期のみであったが、2024年度は2月を除く毎月飛来し個体数も急速に増加した。

これらの鳥は通年飛来する常連や、1回のみ飛来した種と異なり、概ね毎年のようにその季節に立ち寄ってくれる準常連とも言える種たちで、本緑地の存在価値を高める存在といえることから、引き続きこれらの種に注目し歓迎していきたい。

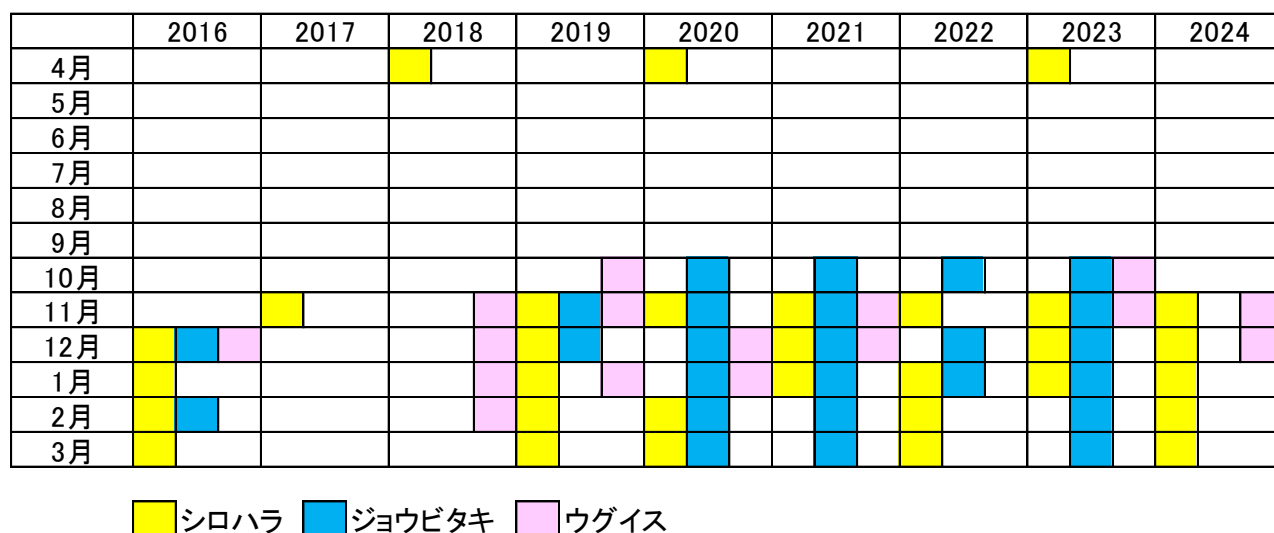


図2-6 飛来頻度の少ない鳥の飛来時期 1

	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
4月									
5月									
6月									
7月									
8月									
9月									
10月									
11月									
12月									
1月									
2月									
3月									

キビタキ カワラヒワ アオジ

	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
4月									
5月									
6月									
7月									
8月									
9月									
10月									
11月									
12月									
1月									
2月									
3月									

アカハラ ムクドリ オナガ

	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
4月									
5月									
6月									
7月									
8月									
9月									
10月									
11月									
12月									
1月									
2月									
3月									

カシラダカ モズ マミチャジナイ

図 2-6 飛来頻度の少ない鳥の飛来時期 2

(6) 近年増加傾向の鳥

2023 年度以降に飛来数の増加が顕著である野鳥にアカハラとオナガがあげられる。今後もこの傾向が続くかは不明であるが、その予兆と見なしてこの 2 種の飛来傾向について記載する（図 2-7、図 2-8）。

アカハラは 2020 年 1 月に 7 羽が初確認され、2022 年 5 月に 1 羽確認された。その後 2023 年度の 1～4 月、2024 年度の 12～3 月には多くの個体数が飛来した。日本では中部東北以北の冷温帯の山地から平地で繁殖し、それ以南の主に太平洋側の低い標高から平地で越冬します（バードリサーチ, 2023）。アカハラの繁殖分布と越冬分布は近年変化していると見られ、気候変化の影響も一因と考えられている（バードリサーチ, 2018a）。都心への飛来傾向の変化は現時点では明らかではないが、越冬地の変化に伴う可能性も考えられ、今後の推移を見守っていくべき種といえる。

オナガは 2023 年 6～8 月に初めて飛来し、9 月以降は飛来が見られなかったが、2024 年 4 月以降、群れを含めて多数の飛来が見られ、2024 年度には駿河台の屋上庭園でも人への頻繁な威嚇と幼鳥の確認から、繁殖がほぼ間違いなく行われたと言える。2024 年度は 2 月以外は毎月確認され、特に 4～8 月は多数の個体が記録され、探鳥会でもよく確認された。オナガはバードリサーチが 20 年ごとに実施している東京都鳥類繁殖分布では、1970 年代から 90 年代には減少傾向を示していたものの都心部では拡大しているところもあることが 2010 年代の調査からわかっている（バードリサーチ, 2018b）。一方で全国的には減っているとされ、特に西日本では少ない鳥とされていることから、都心の駿河台緑地をはじめとする繁殖地は貴重な生息地となり得る可能性を秘めており、今後の推移が注目される。

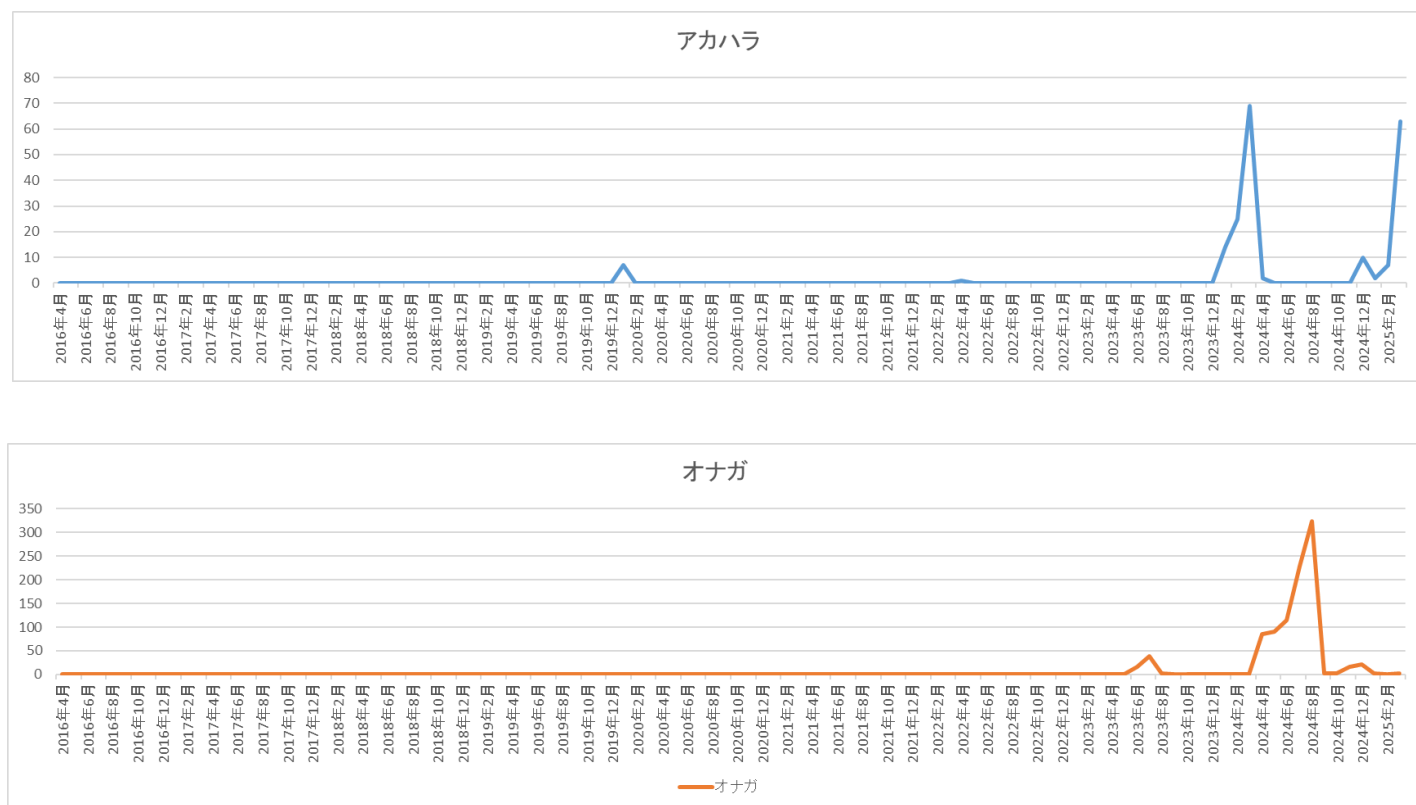


図 2-7 アカハラとオナガの月別個体数の変化

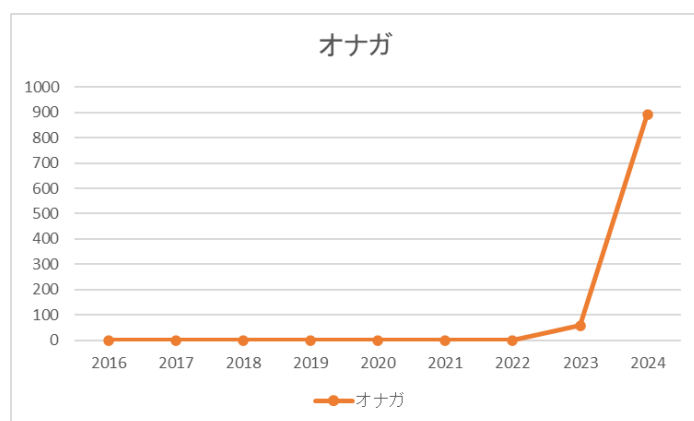


図 2-8 アカハラとオナガの個体数の年変化

(7) 特筆すべき種

カメラでの観察頻度が低い種をここでは「特筆すべき種」とした。中には都市内で比較的によく見られる種も含まれているが、駿河台緑地に降り立ってバードバス等の利用が確認されたという観点から述べている。

これまでもクロツグミ（2017年10月）、マミチャジナイ（2017年10月・2022年2月）、ヒメアマツバメ（2018年6月）、ハクセキレイ（2018年11月・2023年1月）、オオコノハズク（2020年1月）、カケス（2020年10月）、モズ（2020年10月・2023年9月）、ヤマシギ（2020年12月）、クロジ（2022年1月）、カシラダカ（2023年11月）などが特筆すべき種として記録されている。

2024年度に初めて記録された種はいないが、キビタキ（2024年5月）、カワラヒワ（2025年3月）、モズ（2024年10月）、ムクドリ（2024年4月・7月）、カシラダカ（2024年11月）が飛来した。

この中で2度目の飛来となったカシラダカは、東京都区部のレッドリスト（2023）の絶滅危惧Ⅱ類に掲げられている種で、冬鳥として全国に飛来するが、全国的に減少傾向にあり、また世界的にも急減しているとされている（東京都レッドデータブック）。本緑地には渡りの途中で立ち寄ったと見られ、渡りの季節に再び飛来することを期待する。



図 2-9 モズ（上：10月13日）とカシラダカ（下：11月7日）

3. 場所の利用特性

(1) 月変化と種ごとの利用傾向

5 箇所のバードバスのどこを良く利用するかについて、全個体数と主な種について月別の個体数変化をもとに分析した。図 3-1 (1) ~ (10) に種ごとに場所別の利用個体数の月変化を示した。これらの図よりそれぞれ以下の傾向が読み取れる。

- ①全個体数はいずれも冬期間によく利用される傾向が見られたほか、菜園横とサンクチュアリでは他の季節でも比較的良好に利用される傾向が見られた (図 3-1 (1-1,1-2))。
- ②キジバトはどの場所でも 11 月以降において顕著な利用増が見られ、中でも菜園横とサンクチュアリが最も利用され、他の 4 か所もまんべんなく利用していた (図 3-1 (2))。
- ③スズメは菜園横の利用が顕著で、4~7 月に飛来頻度が高く、8 月の菜園横は顕著な飛来数を示していた (図 3-1 (3))。
- ④ドバトは 10 月以降に多く飛来し特に ECOM 前庭、ビオトープ、菜園横をよく利用していた (図 3-1 (4))。2023 年度によく利用していたサンクチュアリでは利用は少なかった。
- ⑤ヒヨドリはサンクチュアリと菜園横において秋以降の利用が多く見られたほか、2 月のビオトープに群れによる顕著な飛来が見られた (図 3-1 (5))。
- ⑥シジュウカラは年間を通して飛来数が少なく 9~10 月は飛来が見られなかったが、その中でも菜園横・南側西・サンクチュアリに飛来の傾向が見られた (図 3-1 (6))。
- ⑦メジロは 2023 年度と異なり、10 月まではほとんど見られず、11 月以降の冬期に菜園横と南側西を中心に飛来が見られた (図 3-1 (7))。
- ⑧ハシブトガラスは 3~4 月に菜園横で多く飛来したのは 2023 年度とよく似ているが、全体として個体数は 2020 年度以降の水準と比べて非常に少なかった。小鳥類の捕食者ともなり得るこの大型の野鳥はこれまでも自在に各所を利用しているようにも見受けられ、他の種にも影響を与える可能性があるだけに、今後ともその動向に注意を払っていく必要がある (図 3-1 (8))。
- ⑨冬鳥のツグミは冬期に ECOM 前庭をよく利用していたが、全体の個体数はこれまでに比べて非常に少なかった (図 3-1 (9))。
- ⑩冬鳥のシロハラは、2024 年度は飛来個体数が多く、菜園横、サンクチュアリ、南側西を中心に ECOM 前庭以外をまんべんなく利用している傾向が感じられた (図 3-1 (10))。
- ⑪今年度多くの飛来が見られたオナガは、菜園横とサンクチュアリをよく利用し、特に 4~8 月に多く確認された (図 3-1 (11))。
- ⑫オナガと同様今年度多くの飛来が見られたアカハラは、冬季に菜園横をよく利用し、次いでビオトープとサンクチュアリに飛来していた (図 3-1 (12))。

以上より、スズメとオナガは春~夏期に主に菜園横を利用し、シジュウカラとハシブトガラスは春期と冬期に菜園横とサンクチュアリに飛来したほか、シジュウカラは南側西もよく利用していた。秋以降の特に冬期は、ハト 2 種 (キジバト・ドバト)、ヒヨドリ、ツグミ類 3 種 (ツグミ・シロハラ・アカハラ)、メジロは南側西を除く 4 か所をよく利用する傾向が明らかとなり、概ね例年の利用形態と同様であった。また個体数の点ではサンクチュアリと菜園横が重要であるほか、ビオトープは冬期のヒヨドリの群れにとって重要で、また南側西は小

鳥類がよく利用するなくてはならないところと言え、ビオトープと ECOM 前庭はハト 2 種がよく利用するなど、5 つが異なった条件で存在することが、全体の野鳥飛来の多様性と受容性を高めているものと改めて確認された。

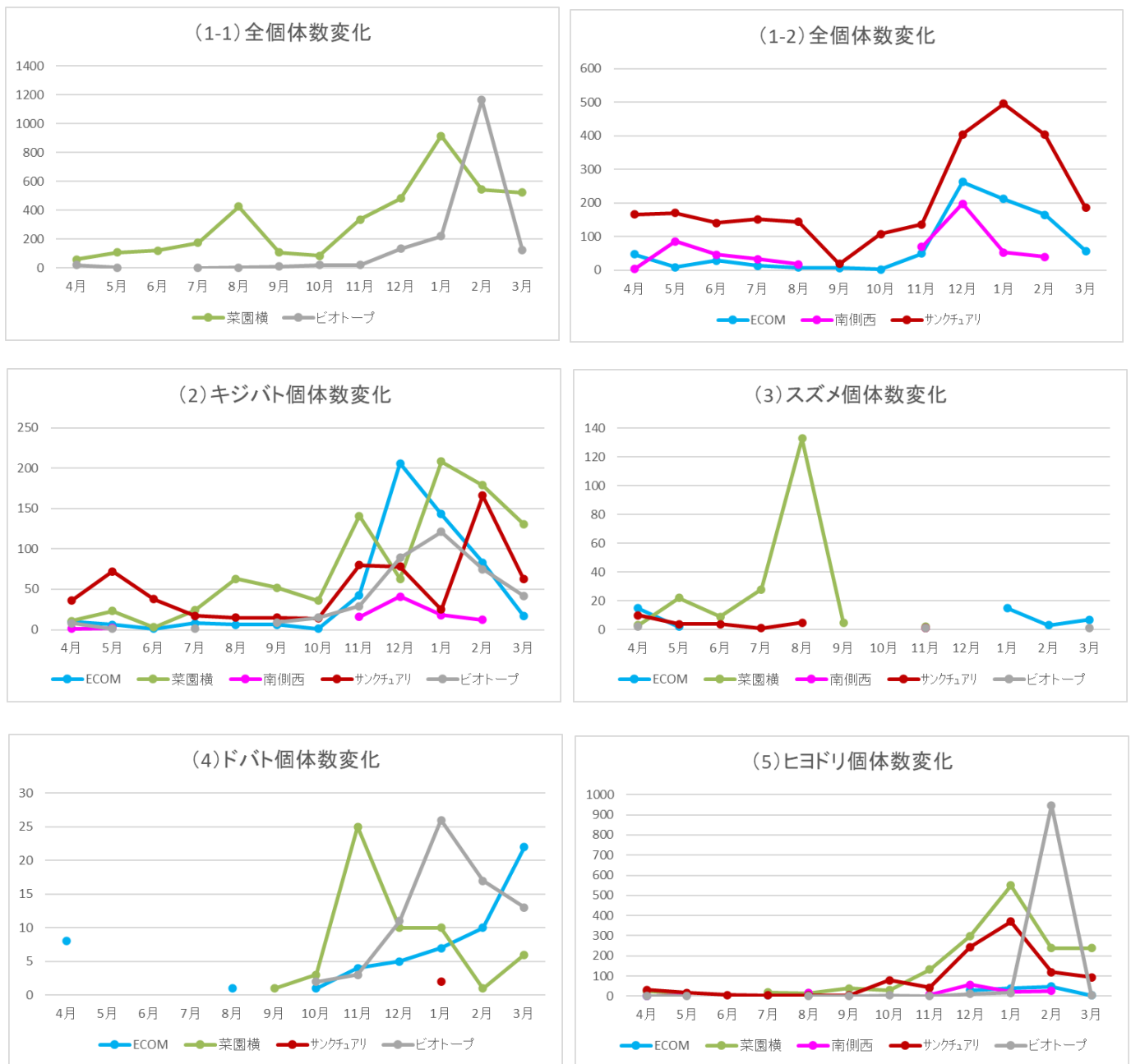


図 3-1 種ごとの場所別の利用個体数の月変化 1

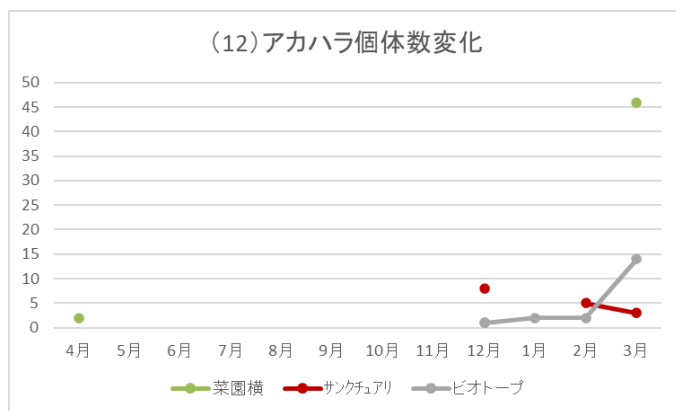
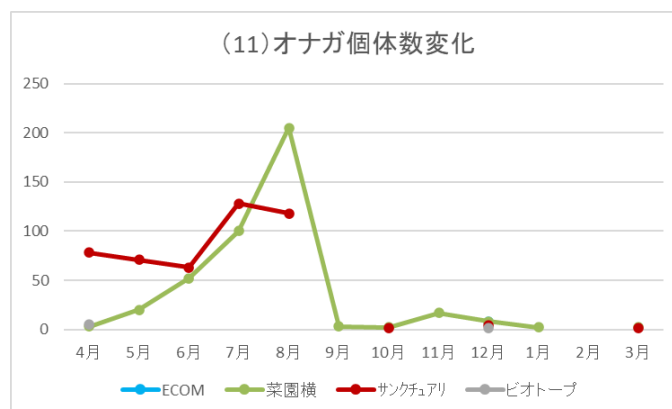
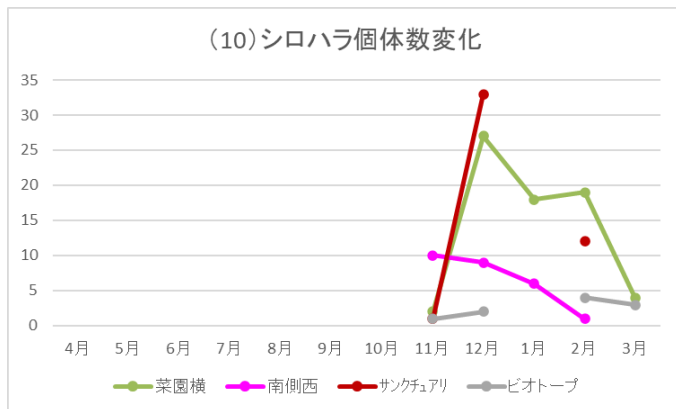
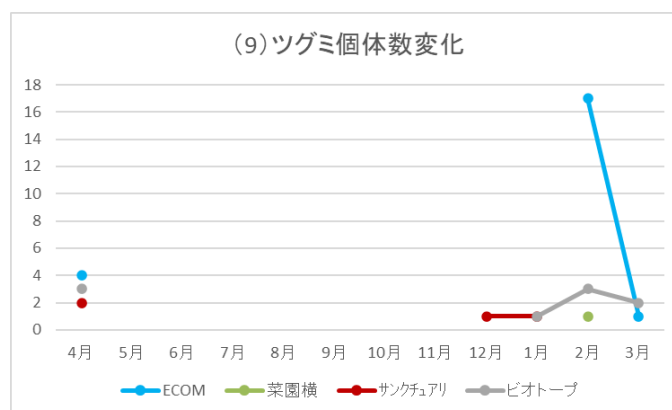
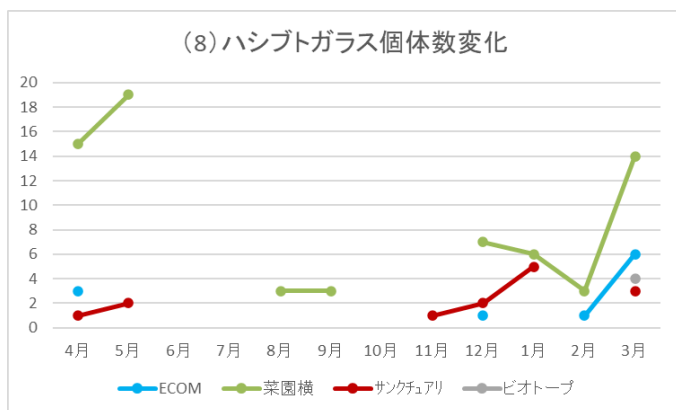
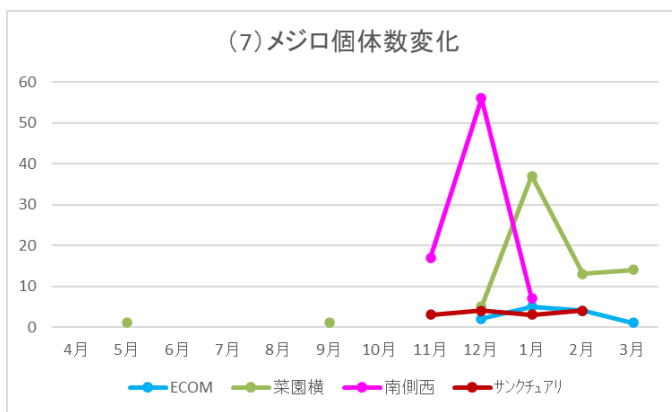
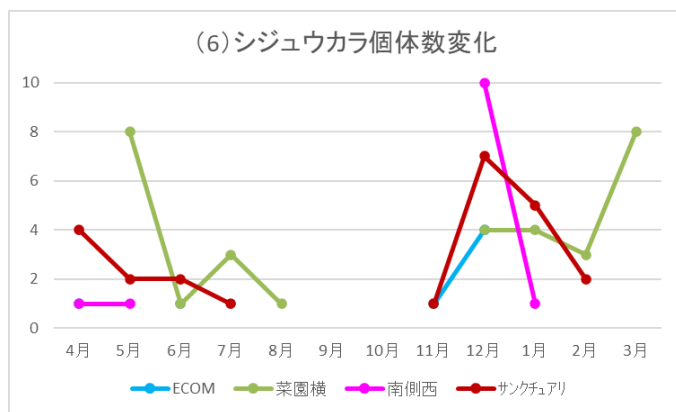


図 3-1 種ごとの場所別の利用個体数の月変化 2

(2) 種ごとの利用機会割合

種ごとに 5 箇所の利用機会（個体数）の比率を算出した結果を図 3-2 に示した。期間は 4 月から 9 月と 10 月から 3 月の 2 期間とした。

4～9 月については、全個体数では菜園横が最も利用され、サンクチュアリがそれに次いでいた。種別に見るとハト 2 種とオナガは菜園横とサンクチュア리를、スズメ・ヒヨドリ・メジロ・ハシブトガラス・アカハラは菜園横が最も割合が高く、これは 2023 年度と同じ傾向であった。ただしシジュウカラは前年度と異なり南側西を最もよく利用していた。

10～3 月については、全個体数では 5 か所がバランスよく利用されていた。種別に見るとスズメとツグミは ECOM 前庭を、メジロとシジュウカラは南側西を、オナガ・アカハラ・ハシブトガラスは菜園横を最も多く利用していた。そのほかの種は 3 箇所または 4 箇所をバランスよく利用している傾向がうかがわれた。2023 年度と比較して概ね同様のパターンを示していたと言える

4～9 月と 10～3 月を比較すると、個体数の多寡により特定の箇所が多くを占めることはあるが、2023 年度と同様に全体として大きく構造は変化することなく、10 月以降は南側西とビオトープの利用度が高まる傾向が見られた。

総じて前節でも述べたとおり、5 箇所がそれぞれ異なる環境を有することで、開放的である、遮蔽的であるなど種の好みに応じた環境が随時選択された結果、全体の野鳥飛来の多様性と受容性を高めているものと推察された。

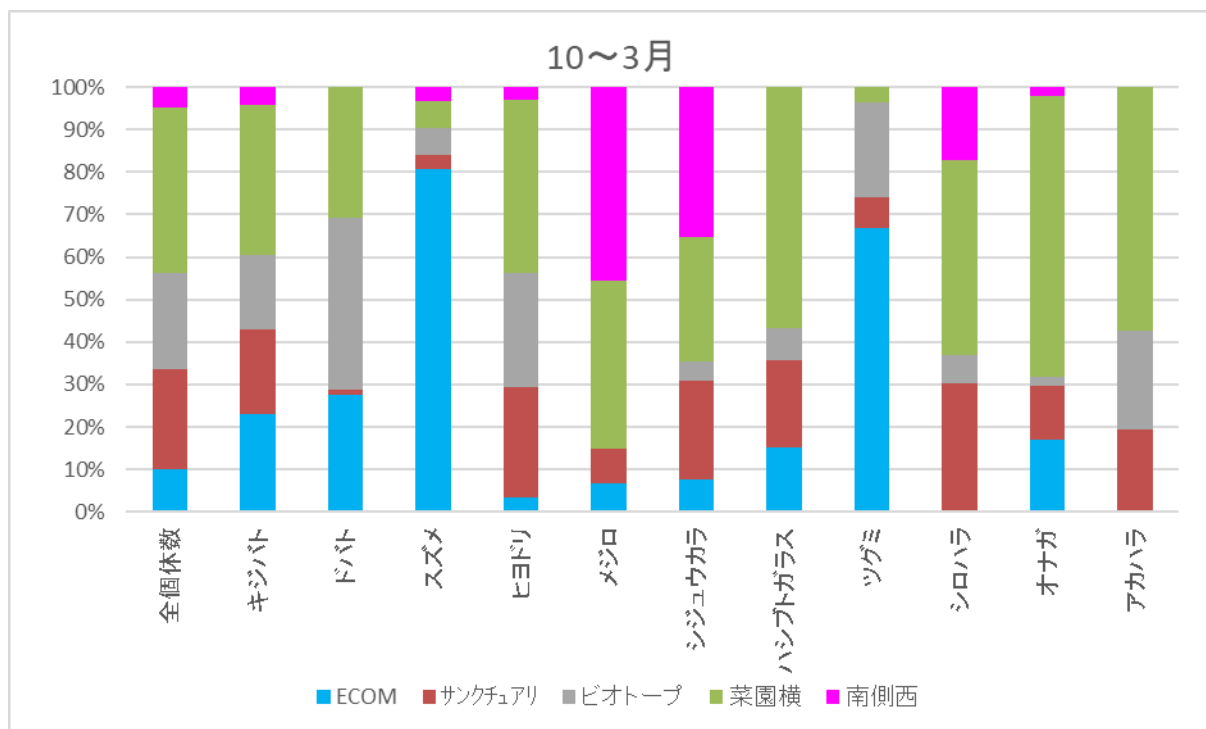
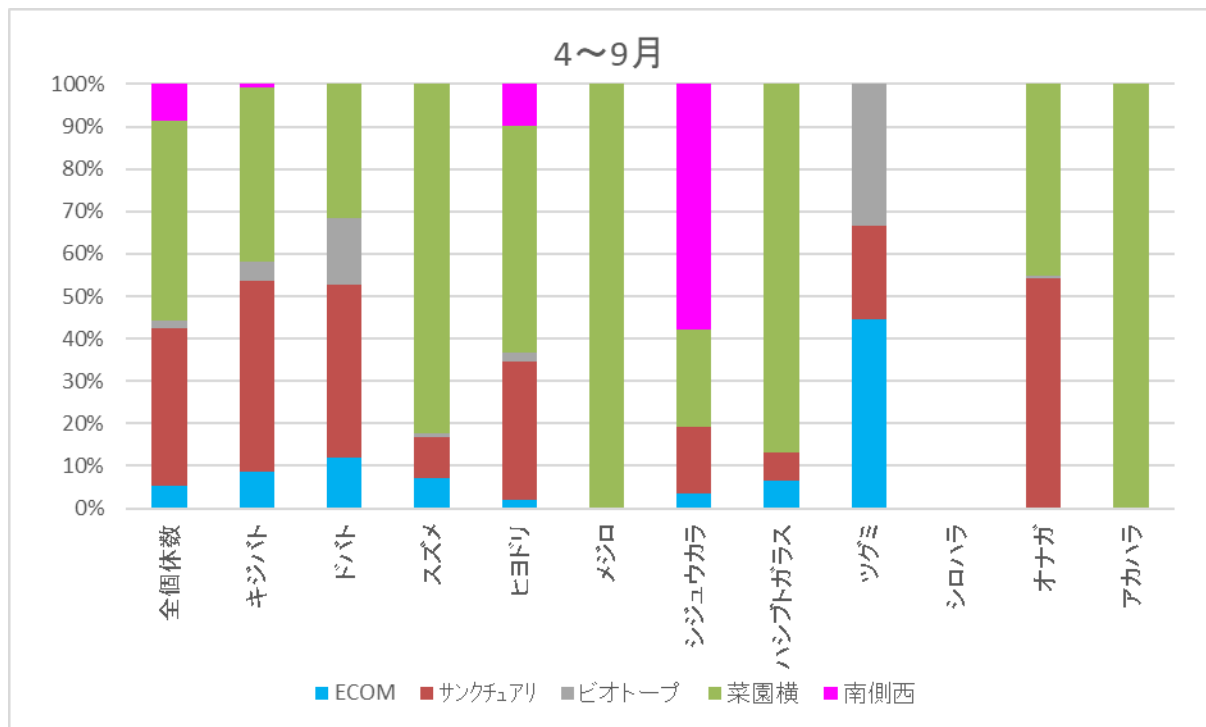


図 3-2 主な種における場所別の利用機会比率

(3) 利用個体数の種別順位

5箇所それぞれにおける月別の利用個体数の上位2種をまとめた(表3-1)。これは時期ごとにどの種が最もバードバス等を利用しているかを示している。

結果を見ると、サンクチュアリでは2023年度は8月まではスズメとハシブトガラスが最も多かったが、2024年度はオナガがこれに取って代わることとなった。9月以降はキジバトとヒヨドリが上位を占めるのは2023年度と同様であった。

屋上ビオトープでは2023年度はドバトが目立っていたが、2024年度はドバトの減少によりキジバトがほぼ一位を占める結果となった。

ECOM前庭では2023年度と比べてドバトとハシブトガラスが減ったこともあり、4月のスズメ、3月のドバトを除いてキジバトが首位を占める結果となった。

菜園横ではサンクチュアリとどうよ、スズメとハシブトガラスが減少したため、8月まではこれに代わるようにオナガが一位となり、9月以降はキジバトとヒヨドリによって占められた。

最後に南側西は2023年度と比べてヒヨドリとメジロが増えて結果に反映された形となった。総じて、年間全体で個体数が減ったスズメ、ドバト、ハシブトガラスに代わって、個体数の増えたオナガ、キジバト、ヒヨドリが上位を占める結果となった。以上より、それぞれの種の個体数増減と嗜好が反映する形で、バードバス等の利用が季節変化している様子が明らかとなった。

表 3-1 各バードバスにおける月別利用個体数の上位 2 種

サンクチュアリ

	1位	2位(色付は同数)
4月	オナガ	キジバト
5月	キジバト	オナガ
6月	オナガ	キジバト
7月	オナガ	キジバト
8月	オナガ	キジバト
9月	キジバト	ヒヨドリ
10月	ヒヨドリ	キジバト
11月	キジバト	ヒヨドリ
12月	ヒヨドリ	キジバト
1月	ヒヨドリ	キジバト
2月	キジバト	ヒヨドリ
3月	ヒヨドリ	キジバト

屋上ビオトープ

	1位	2位(色付は同数)
4月	キジバト	オナガ
5月	キジバト	ヒヨドリ
6月	—	—
7月	キジバト	—
8月	ヒヨドリ	—
9月	キジバト	ヒヨドリ
10月	キジバト	ヒヨドリ
11月	キジバト	ドバト
12月	キジバト	ドバト・ヒヨドリ
1月	キジバト	ドバト
2月	ヒヨドリ	キジバト
3月	キジバト	アカハラ

ECOM

	1位	2位(色付は同数)
4月	スズメ	キジバト
5月	キジバト	スズメ
6月	キジバト	シジュウカラ
7月	キジバト	ヒヨドリ
8月	キジバト	ドバト
9月	キジバト	—
10月	キジバト	ドバト
11月	キジバト	ドバト
12月	キジバト	ヒヨドリ
1月	キジバト	ヒヨドリ
2月	キジバト	ヒヨドリ
3月	ドバト	キジバト

菜園横

	1位	2位(色付は同数)
4月	ヒヨドリ	ハシブトガラス
5月	キジバト	スズメ
6月	オナガ	スズメ
7月	オナガ	スズメ
8月	オナガ	スズメ
9月	キジバト	ヒヨドリ
10月	キジバト	ヒヨドリ
11月	キジバト	ヒヨドリ
12月	ヒヨドリ	キジバト
1月	ヒヨドリ	キジバト
2月	ヒヨドリ	キジバト
3月	ヒヨドリ	キジバト

南側西

	1位	2位(色付は同数)
4月	キジバト	ヒヨドリ シジュウカラ
5月	ヒヨドリ	キジバト
6月	—	—
7月	シジュウカラ	—
8月	ヒヨドリ	—
9月	—	—
10月	—	—
11月	メジロ	キジバト
12月	メジロ	ヒヨドリ
1月	ヒヨドリ	キジバト
2月	ヒヨドリ	キジバト
3月	—	—

4. 飛来する集団の大きさ

(1) 集団の大きさの月変化

野鳥の飛来は1羽単独で来ることも、ペアや家族と思われる数羽で、さらには集団で飛来することもある。そこで1回の観察機会における個体数に着目し、主要4種（キジバト・スズメ・ドバト・ヒヨドリ）、シジュウカラ、メジロの6種に加えて、2024年度に多数の飛来があったオナガを含む7種を対象に各月における集団サイズの平均値を求め（全ての飛来機会において1羽で飛来した場合は1.0となる）、月別の変化を図4-1に示した。これより種ごとに以下のような特徴の違いが見られた。

- ①キジバトは集団サイズのピークが9月、11月、3月に見られ、最大値は9月の1.09であった（2023年度は7月、9月、1月（1.15））。
- ②スズメの集団サイズのピークは1月で最大値は7.5であった。この数値は2回の飛来機会のうちの1回が14羽であったことによる（2023年度は11月（1.78））。
- ③ドバトの集団サイズは3月にピークが見られ、最大値は1.17でその時期は複数で行動していることがうかがえた（2023年度は2月（1.31））。
- ④ヒヨドリの集団サイズのピークは7～8月と2月に見られ、最大値は2月の2.05であった。2023年度は欠測があったものの、冬期間に群れによる飛来が多くみられる傾向は2024年度も見られた。群れの個体数の最大は12羽であった（2023年度は9月（1.19））。
- ⑤シジュウカラの集団サイズは1月にピークが見られ、最大値は1.09であった。ただし飛来個体数が少ないことに留意しておく必要がある（2023年度は10月（2.0））。
- ⑥メジロの集団サイズのピークは2023年度と同じで12月と3月であり、最大値は1.40であった。冬期にピークが見られるのは例年の傾向と同様であった（2023年度は12月と3月（1.62））。
- ⑦オナガの集団サイズのピークは9月で最大値は1.5であった。11～12月にもゆるやかなピークが見られた。飛来数が多かった8月までは繁殖のため単独行動が多く、巣立った9月須高に家族を中心とした群れで行動していたものと推察された。

2021年度はキジバト、シジュウカラの集団個体数（1羽を含む）の平均値のピークが1.3以下、スズメ、ドバト、ヒヨドリ、メジロが1.4以上、2022年度は1.4を境にキジバト、シジュウカラが1.4以下、残りの4種で1.4を超える数値が見られるという共通した傾向があった。2023年度は1.3を目安としてキジバトとヒヨドリがこれを下回り、スズメ、ドバト、シジュウカラ、メジロがこれを上回っていた。2024年度は1.3を目安として、これを下回ったのがキジバト、シジュウカラ、ドバト、オナガ、上回ったのがスズメ、ヒヨドリ、メジロとこれまでと概ね同様の傾向が示された。

以上のことから、集団サイズに季節変化があること、また種によっては特定の時期にそれが顕著となることが2019年度以降と同様に示され、それぞれの種の季節に応じた繁殖行動や暮らし方の違い、行動を共にする家族サイズ、都心の緑地利用形態が集団サイズの季節変動に関わっているものと推定された。



図 4-1 集団サイズの月別変化

(2) 過去 4 年間の傾向

集団サイズの月別変化のパターンが年によって変化するのを見るため、過去 4 年間の月別変化を図 4-2 に示した。全体としてはシンクロしている傾向は感じられるものの、個別に見ると年による違いも見えてくる。

キジバトは冬期の数値は概ね同じ水準だが、夏期については 2022 年度が顕著に高かった。ヒヨドリは冬期に群れで飛来する傾向（ただし 2023 年度は群れの飛来が少なかった）と夏場にも高まることを見出された。スズメは 2024 年の 2 月を除けば変動がよくシンクロしており、いずれも 11 月にピークが見られ 9～11 月と 2 月に複数で行動している傾向が読み取れた。メジロは年によるバラツキがみられるものの概ね 9～12 月に高い傾向を示した。ドバトとシジュウカラは毎年の共通する傾向は見出しにくかった。

これらの毎年に共通してみられる傾向、及び年による変化の要因としては、繁殖の場所や成功に関わること、移動の時期・ルート・形態（集団が単独かなど）などが考えられる。集団サイズは都市における生息個体数を左右する繁殖活動及び移動生態の動向を読み取る一つの指標とも考えられることから、今後とも引き続き着目していきたい。

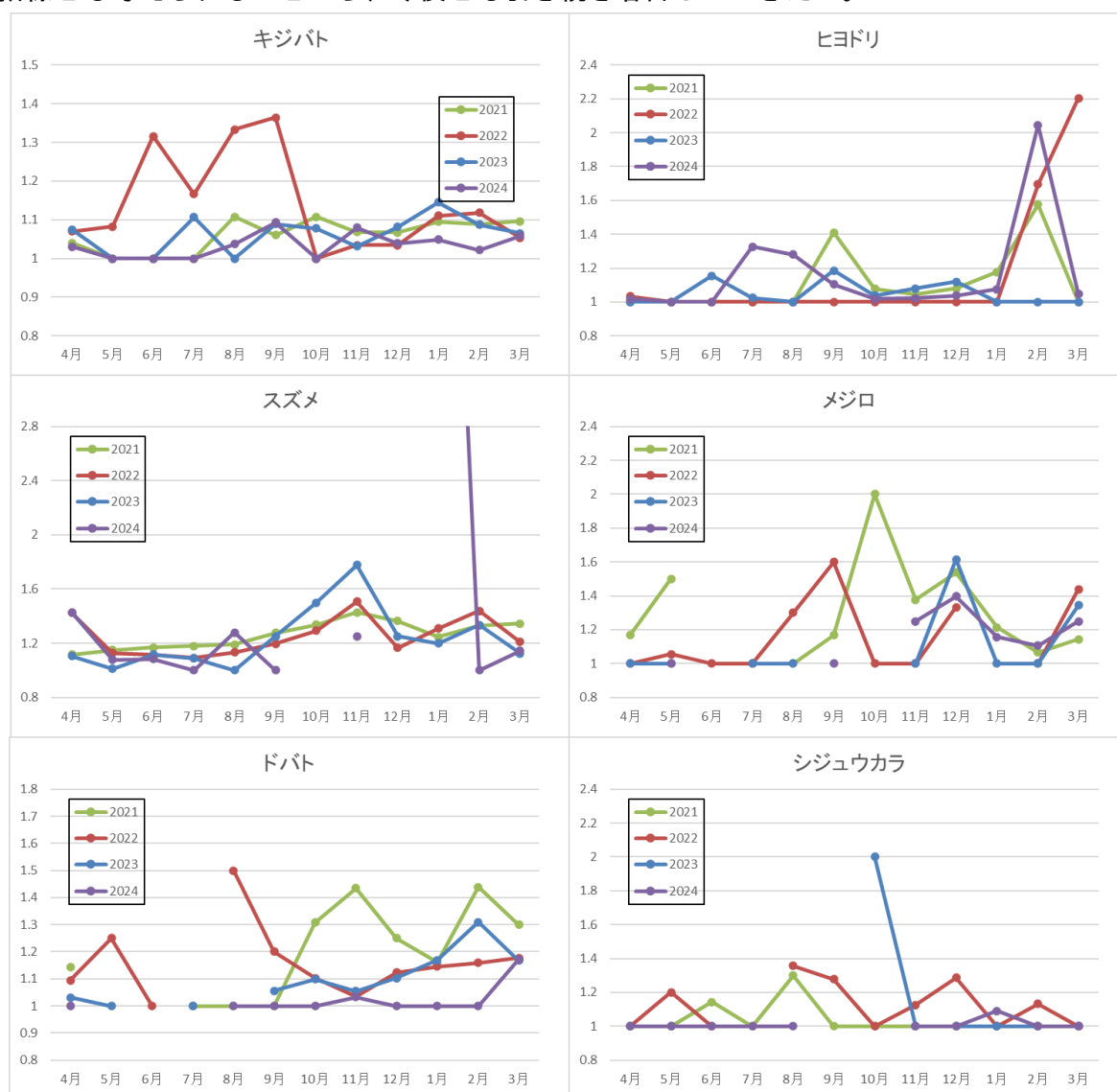


図 4-2 過去 4 年間の集団サイズの月別変化

5. 哺乳類による利用

5 箇所サイトのうち、ECOM 前庭は地上からのアクセスが容易であり、夜間にノネコ、クマネズミ、ハクビシンの哺乳類 3 種がしばしばやって来る。2023 年 8 月と 2024 年 6 月にはクマネズミと異なるドブネズミ（耳の大きさと尾の長さから）と思われる個体も確認された。南側西も地上部にあるが、柴壁に囲まれて哺乳類は基本的に利用できない。ただし何らかの隙間から侵入することもあり、2020 年度はノネコ（6 月）、ハクビシン（6 月・10 月）、クマネズミ（7 月：ただし南側東）が記録され、2023 年度は 11～1 月にかけてクマネズミが頻繁に確認された。入口に隙間があったことが原因と見られ、それを改善した。

屋上にある 3 箇所については、クマネズミが 2017 年に屋上に登りサンクチュアリで頻繁に記録され菜園に被害をもたらしたことがあり、その後対策がとられて屋上での観察はされなくなったが、2020 年度の 9～11 月に再び屋上ビオトープとサンクチュアリで確認され、また 2021 年度においても 4～8 月に菜園横、サンクチュアリ、屋上ビオトープにおいて確認がされ、屋上への通路と見られる足跡のあるパイプを処置し、屋上に再び忌避剤を設置するなどの対策が取られた。しかしながら、2022 年度以降も屋上の 3 箇所で確認され菜園への被害も報告された。2024 年度においては通年にわたって個体数の増加が顕著に見られ、ECOM 前庭 39 個体、南側西 148 個体に対して、屋上ではビオトープ 227 個体、サンクチュアリ 279 個体、菜園横 389 個体と、過去になく頻出し、特に 12～2 月に多い傾向が見られている。引き続き対策は取られているが、侵入経路の特定は難しく、また出没時期も通年に渡り、引き続き侵入経路の発見と忌避対策に努めることが求められる。その一方、完全に防ぐことは困難とも言え、菜園の被害防止に重点を置いた対策に特化する選択も考えられる。

図 5-1 に 2016 年度以降の哺乳類 3 種の個体数変化を示した。ECOM 前庭のノネコについてはほぼ毎月確認され、2018 年 6 月以降は 10 個体以下と少ない数で安定していたが、2021 年度以降は確認されない月が増え、2023 年度は 6 個体、2024 年度は 2 個体のみと全体として減少傾向が顕著である。クマネズミは断続的に確認されていたが、2022 年度以降増え続け、2024 年度は 1000 個体を超えるこれまでにないほどの件数となった。ハクビシンは都市内ではしばしば見られ、本緑地にも主に春から夏にかけて少数だが不定期に確認される。

図 5-2 に 2016 年度以降の年間総個体数の変化を示した。これを見るとノネコは減少傾向にあることが明らかである。ノネコは個体識別しており、今後何らかの分析も可能である。クマネズミは前述のとおり 2022 年度以降顕著に増加しており、引き続き動向の把握とそれに応じた対策の検討が急務と言える。

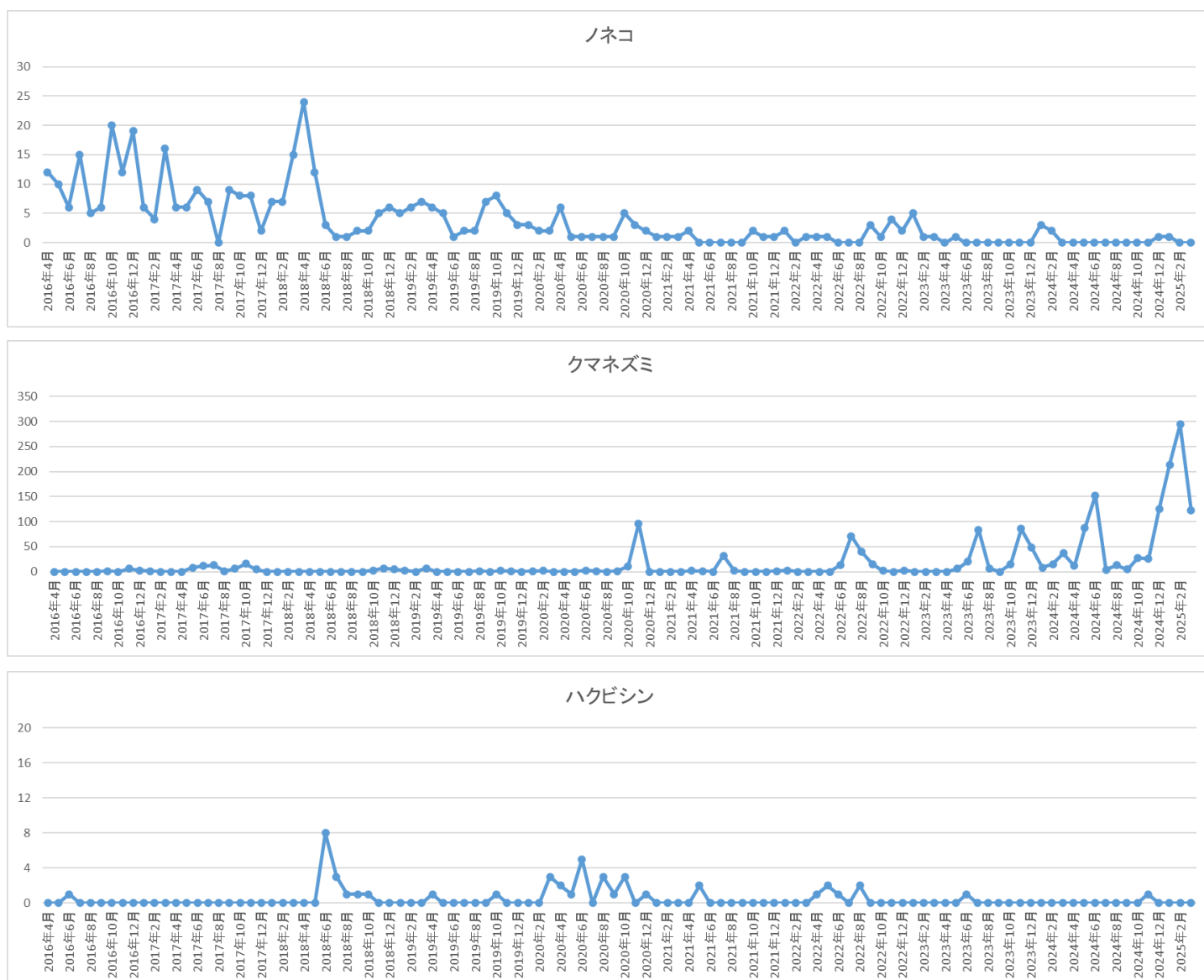


図 5-1 2016 年度以降の主な哺乳類の個体数変化

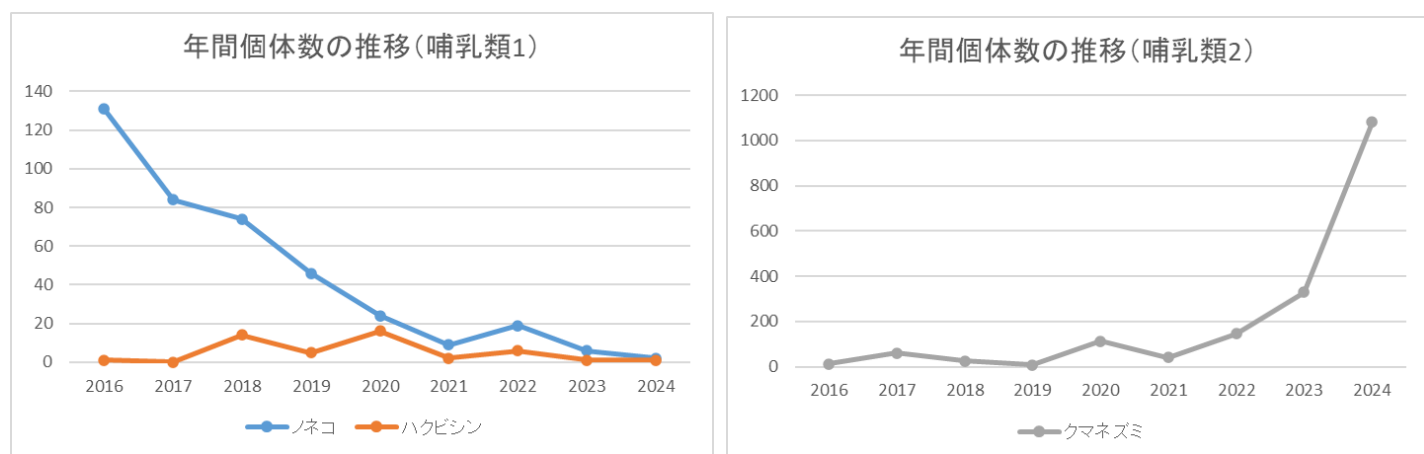


図 5-2 2016 年度以降の哺乳類の年間総個体数の変化

6. 定例探鳥会での観察結果

2014 年 6 月以降、雨天による中止を除いて基本的に毎月第 2 木曜朝、2023 年度からは第 2 水曜朝に、一般の方々の参加を得た探鳥会を開催している。これまで 25 種（種が特定できない 3 種を除くと 22 種）を記録している。2020 年度以降は新型コロナウイルスによる緊急事態宣言などが繰り返され、2021 年度は 5 回、2022 年度は 9 回、2023 年度と 2024 年度はそれぞれ 11 回の観察会を行い、2024 年度は計 16 種を確認することができた。

図 6-1 にこれまでの種数の変化を、また図 6-2 に平均種数の変化を示した。毎回の確認種数は、2020 年度に一旦減ったが、徐々に増え、2024 年度は過去最高の 7.91 種となった。全体としては一定の水準が維持されており、常連の野鳥を中心に今後の継続と確認種の増加が期待される。

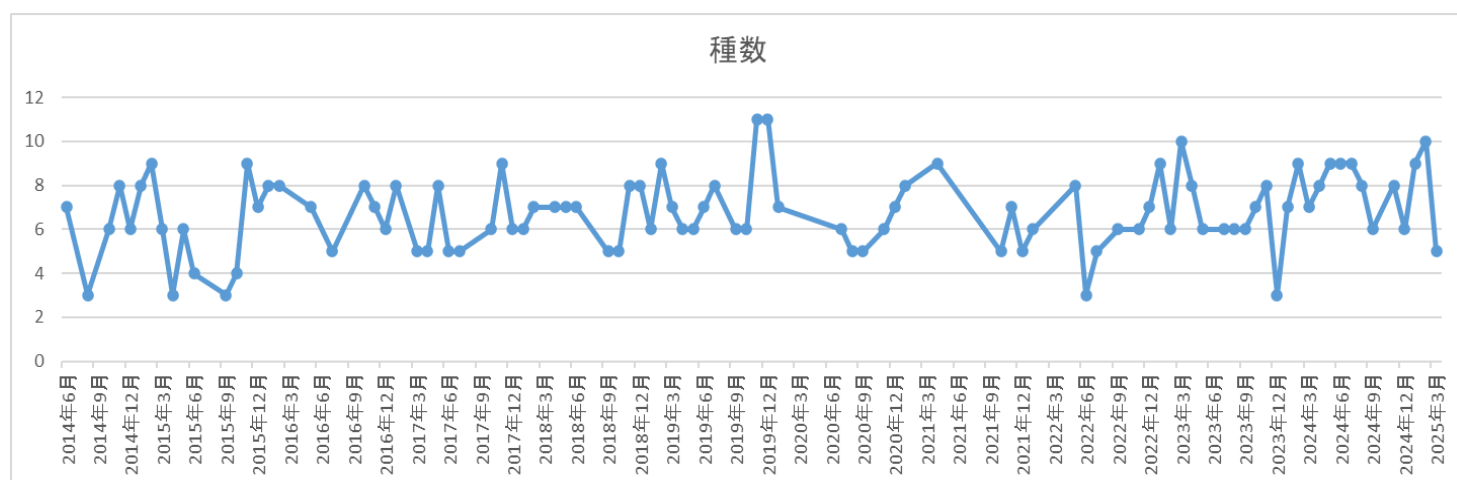


図 6-1 2014 年 6 月以降の確認種数

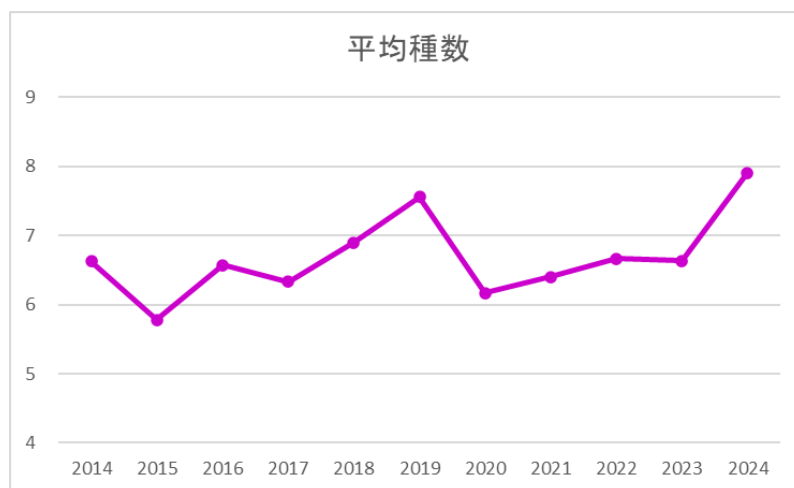


図 6-2 年度ごとの月別平均種数

常連として観察される種は、カメラデータと同様、キジバト、スズメ、ドバト、ヒヨドリ、シジュウカラ、メジロで、それに加えて上空で良く観察されるヒメアマツバメとハシブトガラスもほぼ毎回観察される。オナガは 2023 年度に観察されたが、2024 年度は 5～7 月、11 月、2 月と 5 度観察された。また 2018 年度に初観察のイソヒヨドリは、その後 2021 年度に

一度観察されたのみであったが、2024 年度は 4 月、5 月、8 月と 3 度観察された。さらに 2024 年度はハヤブサを初確認した。

表 6-1 に 2014 年度以降の探鳥会での全記録種、2024 年度の探鳥会での記録種、2016 年度以降のカメラによる全記録種、及び 2024 年度のカメラ記録種を一覧にまとめた。両方併せて 37 種（種が特定できない 3 種を除くと 34 種）を記録している。探鳥会での記録種は 25 種、カメラは 27 種で、探鳥会では上空を飛ぶ種も記録されるなど、いくつかの種は異なるものの、ほぼ同様の数字となっている。異なる方法を組み合わせることで、都市における本緑地の役割をさらに意味づけることができると思われる。なお 2024 年度の探鳥会とカメラの合計確認種数は 22 種となった。

表 6-2 に 2014 年 6 月以降の全探鳥会（74 回）を通しての出現率を種ごとに算出し高い順に並べた。最も出現率が高かったのはヒヨドリで、ヒメアマツバメ、スズメがこれに続いた。2 回に 1 回は観察される出現率 50%以上の鳥はスズメ、ハシブトガラス、キジバト、メジロ、ドバト、シジュウカラの 6 種であった。

表 6-1 探鳥会とカメラデータの記録種の比較

	探鳥会記録	2024探鳥会	カメラ記録	2024カメラ
アオサギ	※			
アオジ			※	
アカハラ			※	○
イソヒヨドリ	※	○		
ウグイス			※	○
オオコノハズク			※	
オオタカ	※			
オナガ	※	○	※	○
カケス			※	
カシラダカ			※	○
カモメsp	※			
カラスsp	※			
カワウ	※	○		
カワラヒワ	※	○	※	○
キジバト	※	○	※	○
キビタキ			※	○
クロジ			※	
クロツグミ			※	
シジュウカラ	※	○	※	○
ジョウビタキ	※		※	
シロハラ	※	○	※	○
スズメ	※	○	※	○
チョウゲンボウ	※			
ツグミ	※	○	※	○
ツバメ	※	○		
ドバト	※	○	※	○
ハイタカorツミ	※			
ハクセキレイ	※		※	
ハシブトガラス	※	○	※	○
ハヤブサ	※	○		
ヒメアマツバメ	※	○	※	
ヒヨドリ	※	○	※	○
マミチャジナイ			※	
ムクドリ			※	○
メジロ	※	○	※	○
モズ	※		※	○
ヤマシギ			※	

表 6-2 探鳥会における出現率

探鳥会確認種	探鳥会出現率
ヒヨドリ	97.9%
ヒメアマツバメ	95.7%
スズメ	85.1%
ハシブトガラス	64.9%
キジバト	58.5%
メジロ	58.5%
ドバト	52.1%
シジュウカラ	52.1%
ハクセキレイ	23.4%
カワウ	16.0%
カワラヒワ	12.8%
ツグミ	11.7%
カラスsp	9.6%
ジョウビタキ	8.5%
オナガ	6.4%
イソヒヨドリ	5.3%
ツバメ	3.2%
オオタカ	3.2%
シロハラ	2.1%
チョウゲンボウ	2.1%
モズ	1.1%
ハイタカorツミ	1.1%
ハヤブサ	1.1%
アオサギ	1.1%
カモメsp	1.1%

7. まとめと課題

2024 年度はカメラによるモニタリング結果から過去最高（2023 年度）に次ぐ 17 種の野鳥を確認し、特定の種に占有されることなく多くの種が利用していた。月別の個体数及び種数の変動から、2024 年度は従前と変わらず年間を通して多くの野鳥が飛来し、特に冬期間は個体数・種数ともに多いこれまでと同様の傾向を示した。個体数の季節変動は種によって異なり主要な種の多くは冬期に増加するのに対して、スズメ、ハシブトガラス、オナガは春～夏期に多い傾向を示した。シジュウカラについては、2024 年度は冬期に多くみられ季節パターンも従来同様必ずしも一定ではなかった。

2016 年度以降の長期変動から、年間全個体数は 2022 年度、2023 年度とやや減少傾向を示したが、2024 年度は増加を示し 2020・2021 年度に次ぐ 8,462 個体を記録し、野鳥による駿河台緑地の利用は依然として高い水準にあることが示された。種別に見ると、増加傾向にあるのはヒヨドリ、概ね横ばいなのはキジバト、2021 年度まで増加し 2022 年度から減少しているのがスズメ・メジロ、2024 年度になって減少しているのがハシブトガラス・ドバトであった。中でもスズメの減少は止まらず、回復どころか下げ止まりの兆しも見られなかった。メジロについては、2023 年度よりは増えたものの依然として少ない傾向が 3 年連続で続いている。スズメとメジロの減少の理由は不明であり、緑地及び周辺域の内的要因（生息環境・利用環境・競合・攪乱要因など）と外的要因（都市またはその周辺域におけるスズメの動態など）の複合的なものによると推察される。広域的な動態に注意を払いつつ、引き続き本緑地における動態を追跡し、考察につながる観察と情報収集を行っていくことが重要であると考えられる。

2024 年度のトピック的事項として、いくつかのことがあげられる。まずはオナガとアカハラの多数の飛来である。特にオナガは 892 個体と全個体数の 10%を超える数であり、この両種が次年度以降も飛来し定着するかは未知であるが、注視していきたい。個体数としてはスズメが顕著に減少した分を 2024 年度はオナガが補ったとも言える。

また、冬度に関しては、2024 年度はジョウビタキが飛来しなかった。またツグミが減ってシロハラが増えたのも 2024 年度の特徴である。ジョウビタキ過去にも飛来しなかった年があり、冬鳥は年によって変動するのが常であるが、気候変動とも関わる動態と考えられ、引き続き注意を払っていきたい。もう一つ気になる種はアオジである。アオジは 2018 年度と 2019 年度に確認されていたらい飛来しておらず今後の飛来を密かに願っている。ムクドリは 21 年度以降毎年春先に確認されているが、駿河台緑地周辺でしばしば見かけるとの目撃談もあり、継続飛来を期待したい鳥の一つである。カメラではないが、2025 年 1 月の探鳥会でハヤブサを初確認したのも嬉しい出来事である。都心ではしばしば見かけるとの話もあり、これまで以上に探鳥会では上空に注意を払っていきたい。

総じて、周辺一帯においてまとまった緑地の少ない本地域において、本緑地が移動（渡り鳥）と滞在（留鳥）の両面において重要な役割を果たしており、その役割が維持されていることが改めて確認されたと言える。飛来頻度の少ない鳥の飛来時期が概ね同時期であることもそのことを裏付ける証左の一つの言うことができる。加えてこれまでのモニタリングデータは、都市内緑地の野鳥飛来効果のプロセス（増加期間、安定レベルなど）を示す貴重なデータとしての意義も有している点は特に留意すべきであると考えられる。

本緑地が受け入れることのできる野鳥の個体数について、容量（上限）が存在するかは不

明であるが、仮に存在するとすれば、前述した内部要因に制約される面と外部要因に左右される面の両面があるのではないかと推察される。そのような観点に立てば、本緑地における継続的なモニタリングは、以下の二つのことの検出に向けた意義があると言えるだろう。

①駿河台緑地の存在意義

②都心域に飛来する野鳥の増減動向

これらを科学的に明らかにすることは困難である一方、実態として認識することの可能性は存在すると思われ、本緑地におけるモニタリングの継続がそれを示唆する高い潜在性を有していることが期待される。

バードバスと自動撮影カメラを用いて長期に野鳥の飛来状況をモニタリングしている例は（知る限りでは）他にはないと思われ、2024年度は九段生涯学習館の「ちよだ生涯学習カレッジ」において成果の一端を紹介することができた。今後とも外部への成果の発信機会を積極的に得ていくことは、都市緑地の効果をより確かにすることを通して社会貢献していく上でも重要であると考えらる。

最後に、2016年度以降2024年度で9年目となり、2025年度に10年間のデータが蓄積されることとなる。10年間にわたるモニタリングの節目で10年分の取りまとめを行うことは意義あるものと考えられ、次年度にこれを行いたいと考えている。

末筆ながら、本報告に当たって多くの関係者の皆様ご理解とご協力をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

参考資料

浦嶋裕子・城千聡，2019，三井住友海上が取り組む都市緑化と評価制度，ランドスケープ研究 82(2)：374-377.

岡崎元哉，2020，カメラデータを用いた都市企業緑地の飛来野鳥に関する分析，卒業論文：29pp.

加藤貴大・松井晋・笠原里恵・森本元・三上修・上田恵介，2013，都市部と農村部におけるスズメの営巣環境，繁殖時期および巣の空間配置の比較，日本鳥学会誌 62(1)：16-23.

鳥類繁殖分布調査会，2021，全国鳥類繁殖分布調査報告 2016-2021 年（事務局：バードリサーチ），東京都環境局，カラスの生息数等の推移（取組状況）.

https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/nature/animals_plants/crow/jyokyo.html

東京都環境局，東京都レッドデータブック（本土部）2023.

https://www.kankyo.metro.tokyo.lg.jp/nature/animals_plants/red_data_book/400100a20230424184941875

東京都鳥類繁殖分布調査会，2021，東京都鳥類繁殖分布調査報告，特定非営利法人バードリサーチ：177pp.

バードリサーチニュース 2018 年 1 月 a，東京の鳥の 1970 年代からの変化.

<https://db3.bird-research.jp/news/201801-no1/>

バードリサーチニュース 2018 年 4 月 b，気候変動の影響？越冬分布を拓げるアカハラ、オオバン.

<https://db3.bird-research.jp/news/201804-no2/>

バードリサーチニュース 2023 年 9 月，日本の森の鳥の変化：アカハラ.

<https://db3.bird-research.jp/news/202309-no1/>